

医学部ウォーカー

1面：弘前大学グローバルWell-being総合研究所開所式および記念シンポジウム 2面：弘前大学 CONEXT Well-beingイベントセッション 2026 3面：医学研究科長・医学部長寄稿 退職にあたって 4面：退職にあたって 令和7年度医学教育等関係業務功労者表彰を受賞して 日本性科学学会 (JSM Science Award)を受賞して 5面：第29回日本臨床内分秘理学会年次学術集会研究賞 (奨励賞)を受賞して「IDPワールドフォーラム」2025最優秀ポスター賞を受賞して 第78回日本胸外科学会学術集会 (JATS) Case Presentation Awards 食道・食道外科部門「優秀演題賞」を受賞して 6面：Society of Glycobiology 2025 Annual Meeting「Best Poster Award」を受賞して 第1回青森県食道管理ハズズセミナーを開催 7面：ノーベル平和賞受賞「国境なき医師団」講演会 7面：CBT-OSCEの実施状況/MSA活動中間発表会/第4回「多職種連携とDX技術で融合した北東北が創出す 地域医療教育センター」事業シンポジウム開催報告 8面：医学部五年生と青森県知事との懇談会/第163回弘前医学会例会 優秀発表賞を受賞して 9面：弘前大学グローバルWell-being総合研究所開所式 10~12面：各賞受賞/学生だより 13面：大学院生だより/留学だより/OO・GB書籍出版物の紹介 14面：若手教員・医師だより/研究紹介/総務学講座 15面：研究室紹介/脳科学講座/脳科学講座/部活動紹介/硬式野球部 16面：部活動紹介/医学部陸上競技部/写真部/若手研究者紹介/動画/人事異動

題字 元弘前大学長 遠藤正彦氏筆

弘前大学グローバルWell-being総合研究所 開所式および記念シンポジウム

副学長・教授
グローバルWell-being総合研究所副所長
健康未来イノベーション研究機構長 村下公一



グローバル Well-being 総合研究所



研究所

弘前大学は、令和六年度に採択された文部科学省・日本学術振興会 (JSPS)「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業 (J-PEAKS)」における本学の「グローバルWell-being総合研究所」の開所式および記念シンポジウムを、令和七年十二月十二日 (金) に開催しました。

本研究所は、本学の強み・特色である超多項目健康ビッグデータ研究を基盤に、国内外のトップ研究大学との連携や異分野融合型の総合知による研究展開を通じて、Well-being領域における世界トップレベルの研究拠点となることを目指しています。

開所式は、令和七年三月に竣工したグローバルWell-being総合研究棟において開催され、グローバルWell-being総合研究所の最



石橋先生による挨拶



福田学長による挨拶

抱負を述べました。続いて、青森県知事 (代理・青森県経済産業部長 上沢謙一氏)、文部科学省科学技術・学術総括官 井上睦子氏、日本学術振興会理事 塩田剛志氏、青森みちのく



基調講演 (村下)



Kawachi 先生



近藤先生

銀行頭取の石川啓太郎氏から祝辞をいただきました。その後、関係者によるテープカットが行われ、閉会挨拶では、グローバルWell-being総合研究所長である石橋恭之医学研究科長が「研究成果を地域課題の解決や政策提言へとつなげ、Well-being共創社会の実現に貢献していく」と今後の展望を述べました。開所式終了後には、出席者による研究所施設の視察が行われました。



藤原先生



Surkan 先生

今回の開所式および記念シンポジウムを契機として、J-PEAKS採択拠点としての研究力を一層強化し、国内外の研究機関および地域社会と連携しながら、Well-being共創社会の形成に貢献してまいります。最後になりましたが、この場をお借りしてお力をお借りしている学内外の先生方はじめご関係の皆様、大学・自治体・企業の皆様、すべての皆様にご感謝を申し上げます。どうぞ引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



テープカットの様子

引き続き、本研究所最高顧問のIchiro Kawachi先生による「社会疫学の視点からみたWell-being研究の重要性」本研究所顧問の近藤克則先生 (千葉大学名誉教授) による「Well-beingなまちづくり」、藤原武男先生 (東京科学大学教授) による「不確実な時代に生きる子どもたちの未来のWell-beingと「Panola J. Surkan先生 (米国シオニス・ホプキンス大学教授) による「親が子どもに与える影響を調査した世代間研究 (ビデオメッセージ)」と題した特別講演が行われ、国内外の第一線で活躍する研究者四名から多角的な視点での知見が示されました。



パネルディスカッションの様子



会場の様子



弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションサミット2026

副学長・教授
グローバルWell-being総合研究所副所長
健康未来イノベーション研究機構長
村下 公一



岩木在住 館浦氏との対談の様子

名誉教授、順天堂大学大学院健康データサイエンス研究科 特任教授 大江和彦先生より、AIや健康医療データを活用して実現するWell-being社会のあり方についてご講演をいただきました。続いてDeNAチーフエコノミスト/元内閣官房海外ビジネス投資支援室長・内閣審議官 大矢俊雄氏から「世界の中で共に『違い』を創って行くためには?」と題して、DeNAの取組や研究概要をお話しいただきました。



パネルディスカッションの様子

「デジタルツイン戦略最前線」では四名にご登壇いただきました。京都大学大学院医学研究科 内野特定准教授、本学医学研究科附属健康・医療データサイエンス研究センター長 玉田先生、東京大学大学院情報学環 上村准教授、名古屋大学大学院医学系研究科 中柘准教授から、ヘルスケア・デジタルツイン実現に向けた研究の最新状況や今後の方向性についてそれぞれご発表いただきました。

その後特別対談として、岩木地区在住でこれまで毎年のように岩木健診にご参加いただいた館浦氏に、登壇いただき、宮田総研代表取締役社長/ヘルスケアイノベーション代表取締役社長 宮田氏をインタビュアーにお話を伺いました。「健診を受け続けて健康意識が高まり、行動変容にもつながった」というお話をいただきました。会場内はあたたかな雰囲気になりました。最後のパネルディスカッションでは、モデレーターに宮田氏、アドバイザーにCOI-NEXT共創の場形成推進会議委員/名古屋大学大学院医学系研究科附属健康医療ライフデザイン統合研究教育センター 特任教授 水野先生をお迎えし、石橋医学研究科長、廣田先生、中柘先生、瀬川SPL、桂木SIL、五十嵐准教授、中島さん、齋藤会長、企業の代表など幅広い分野から総勢十四名のパネリストが登壇し「グローバルWell-being共創社会の創造に向けて」のテーマの下、討論が展開されました。

令和八年二月六日(金)、弘前大学は青森県・弘前市とともにシンポジウム「弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションサミット2026」を開催しました。まずは開催にご尽力をいただきました学内外の先生方、企画機関の皆様、そしてスタッフとして運営にご協力いただいた皆様に深く御礼を申し上げます。

本サミットは昨年同様アートホテル弘前シティでのリアル開催とオンラインのハイブリッドとし、国内・海外から約三千名の

聴講者にご参加いただきました。今回はテーマを「弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションPJ最前線 グローバルWell-being共創社会の創造」サブテーマを「健康基軸の『経済発展モデル』と『全世代アプローチ』で高QOL&GNH未来社会実現をめざす」と設定しました。

弘前COI-NEXT拠点では、健康を基軸とした「経済発展モデル」と「全世代アプローチ」でWell-beingな地域共創社会の実現をめざし

ています。これまでのCOIの活動成果を基盤に、健康(QOL)の本質的課題解決へ向けて更に力強く挑戦し、STI for SDGsの理念の下、地域から世界の健康づくり(SDGs)への貢献をめざします。本サミットでは新健康未来イノベーション戦略の実現に向け、未来の地域社会モデル、ヘルスケア産業創出等について第一線の産学官金民間関係者が一大集結し、熱い議論が展開されました。

開会にあたり、福田眞作学長、青森県知事 宮下宗一郎氏、弘前市長 櫻田宏氏からご挨拶を頂戴し、来賓として文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域振興課長 国分政秀氏、内閣官房政策参与(グローバル・スタートアップ・キャンパス構想推進室) 松尾泰樹氏、科学技術振興機構(JST) COI-NEXT共創分野・地域共創分野

第1領域副PO 吉田輝彦先生よりお言葉をいただきました。基調講演では、「Well-beingな地域共創社会の実現」と題し、着実に進んでいるWell-being研究戦略の最新状況や今後の展開等について私(村下)よりお話しさせていただきました。

引き続き特別講演では「AIとデータがもたらすWell-being社会」と題し、東京大学



石橋医学研究科長

「経済循環モデル最前線(SIB)」では、東京大学大学院薬学系研究科 五十嵐特任准教授から岩木健診・弘前市データ連携とPF/SIB事業の進展について講演いただき、続いてプロジェクトリーダー/DeSCヘルスケア代表取締役社長 瀬川氏と社会実装副統括/Well-being社会実装本部長 補佐/花王特命エキスパート 桂木氏より拠点の社会実装の最新状況および展望についてご講演いただきました。

「社会実装戦略最前線」では主要企画企業のクラシエ、明治安田、雪印メグミルク、マツダ、博報堂、日本コープ共済/青森県生活協同組合、東北化学薬品、マルマンコンピュータサイ

各社の社会実装状況についてプレゼンテーションを行いました。その後特別対談として、岩木地区在住でこれまで毎年のように岩木健診にご参加いただいた館浦氏に、登壇いただき、宮田総研代表取締役社長/ヘルスケアイノベーション代表取締役社長 宮田氏をインタビュアーにお話を伺いました。「健診を受け続けて健康意識が高まり、行動変容にもつながった」というお話をいただきました。会場内はあたたかな雰囲気になりました。最後のパネルディスカッションでは、モデレーターに宮田氏、アドバイザーにCOI-NEXT共創の場形成推進会議委員/名古屋大学大学院医学系研究科附属健康医療ライフデザイン統合研究教育センター 特任教授 水野先生をお迎えし、石橋医学研究科長、廣田先生、中柘先生、瀬川SPL、桂木SIL、五十嵐准教授、中島さん、齋藤会長、企業の代表など幅広い分野から総勢十四名のパネリストが登壇し「グローバルWell-being共創社会の創造に向けて」のテーマの下、討論が展開されました。

閉会に際し、本学曾我副学長ならびに石橋先生から

会場の様子

弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションサミット 2026

2026.2.6(FRI) 13:00-17:15 ネットワークイベント
アートホテル弘前シティ(弘前市) 申込方法はこちら

「健康基軸の経済発展モデルと『全世代アプローチ』で高QOL&GNH未来社会実現をめざす」

Program

- 開会式 13:00-13:15
- 基調講演 13:15-14:00
- 特別講演 14:00-14:30
- パネルディスカッション 14:30-15:30
- 特別対談 15:30-16:00
- 特別講演 16:00-16:30
- 特別講演 16:30-17:00
- 特別講演 17:00-17:15
- 閉会式 17:15-17:30

申込方法は裏面へ

長崎 寄稿 研究 学部 医学

医学研究科長・医学部長寄稿

医学研究科長 石橋 恭之



第百十二号の医学部ウォーカーにて、弘前大学が文部科学省の令和六年度「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（I-PEAKS）」に採択されたことをご報告しました。全国の大学の中から選ばれた二十五校の一つとして、本学が国際卓越研究大学に次ぐ「研究大学」として認められたことは、大変喜ばしく、また誇らしいことです。

令和七年春には、本事業の拠点となる「グローバルWell-being総合研究所」が竣工しました。そして同年十二月十二日には研究棟にて開所式が挙行され、その後、創立50周年記念会館みちのくホールにて、研究所最高顧問 Ichiro Kawachi 先生（ハーバード公衆衛生大学院教授）による特別記念講演と記念シンポジウムを開催いたしました。多くの方々にご出席いただき、盛会裏に終えることができましたことに、関係各位へ深く感謝申し上げます。

区分	評価基準
S	各大学の設定したロードマップやアウトプット指標・アウトカム指標、振興会の把握した情報等に基づき総合的に評価した結果、当初計画を超える大学ビジョン達成に向けた改善の進展があり、さらなる発展が期待される。
A	各大学の設定したロードマップやアウトプット指標・アウトカム指標、振興会の把握した情報等に基づき総合的に評価した結果、着実な進捗があり、現行の努力を継続することによって、今後も大学ビジョン実現に向けて十分な進展が期待できる。
B	各大学の設定したロードマップやアウトプット指標・アウトカム指標、振興会の把握した情報等に基づき総合的に評価した結果、進捗に一部不足があるが、計画の変更及び実施体制の改善等の早急な対応により、大学ビジョン実現に向けて今後の十分な進展が期待できる。
C	各大学の設定したロードマップやアウトプット指標・アウトカム指標、振興会の把握した情報等に基づき総合的に評価した結果、このままでは当初計画の大学ビジョン達成に向けた改善は難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の適切な変更及び助成額の変更が必要と判断される。
D	各大学の設定したロードマップやアウトプット指標・アウトカム指標、振興会の把握した情報等に基づき総合的に評価した結果に照らすと、進捗が著しく不足しており、今後の努力を待っても当初計画の大学ビジョン達成に向けた改善は困難と思われるので、事業を中止することが必要と判断される。

二〇二六年三月末をもちまして、弘前大学を定年退職することとなりました。この間、皆様からいただきましたご指導、ご支援に心から感謝申し上げます。

私は、弘前大学を卒業後、秋田、沖縄での勤務を経て、一九八八年に弘前大学第二外科に入局いたしました。以来、小野慶一教授、今充教授、佐々木陸男教授ならびに四百人を超える第二外科同門諸兄からご指導をいただき、外科医として手に職をつけるまでとなりました。決して手取り足取りではありませんが、全ての技術を先輩に伝え、自立した外科医を育てあげ、第二外科の文化と伝統には感



退職にあたって

消化器外科学講座 教授 袴田 健一

後二年間及びビジョン実現までの七年間の将来構想など、多岐にわたります。現在、福田学長を中心に全学を挙げて取り組んでおりますが、最大部局である医学研究科は、この中間評価において目に見える成果を示す大きな責任を担っています。特に、科研費等の競争的研究費の獲得、トップ一〇論文・国際共著論文のさらなる増加、そして国際共同研究の推進は、我々に課せられた喫緊の課題です。中間評価はSからDまでの五

段階で判定されますが、現時点では中位の「B評価」さえも容易ではない厳しい情勢にあります。万が一「D評価」となれば、事業そのものが中止という事態を招きかねません。（左上表）

人口減少社会が進展し、地方大学を取り巻く運営環境はますます厳しさを増しています。十年後に弘前大学が日本を代表する研究大学として確固たる地位を築けるよう、皆様の一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

二〇二六年三月いっぱい退職となりました。教授としては二〇一九年一月に採用されて六年と短い間でしたが、医学部ならびに附属病院の皆様のご支援のおかげ様で、これまでやってこられました。救急はその地域ごとに、病院の機能や分野が異なる中で、弘前大学・馬場医学大学との国際交流などを担当させていただきました。また、二〇二〇年からは学長特別補佐、附属病院長として、経営指標に基づいた診療科への病床・医療資源配分と経営改善、医師の働き方改革への対応、新規センターの設置、遠隔医療の推進、病院の国際化などに取り組む機会をいただきました。

お願いすると快くご協力いただける、弘前大学ならではの温かな文化に支えられた病院長職でした。

学生時代を含めると四十五年以上に渡り弘前大学にお世話になりました。自分一人では到底得ることのできない貴重な機会を数多くいただき、これらへの恩返しはまだまだ不十分と言わざるを得ませんが、今後はOBとして弘前大学の応援団に回りたいと思います。弘前大学医学部の益々のご発展を心から祈念申し上げます。

布によってそれぞれの体制でやっていく必要があります。弘前大学医学部附属病院は、地域の、かつ青森県全体の最後の砦としての役割があります。救急部が中央診療棟の四階にあったことが物語っていますが、以前は積極的に救急患者を受け入れていたわけではありませんでした。しかし、大血脈疾患や心臓疾患などを膜下出血、心臓疾患などを膜下出血、心臓疾患などを膜下出血の担当科が受け入れて診療してまいりました。二〇一〇年四月に遠藤正彦学長のご尽力により緊急被ばく医療が提供できる救命センターが完成し、本格的に三次救急の受入を開始しました。私もその一員として加わり、それまでの循環器救急のみならず、外傷診療や災害医療にも携わってまいりました。二〇一一年三月に東日本大震災と福島第一原子力発電所（1F）事故が引き続いて起こりました。DMATとして被災地宮古に赴いて医療活動をしたのに引き続き、1F事故対応では何度も福島に行き、原発内診療所や避難住民の一時帰宅事業での健康管理など、被ばく医療を実践する機会に恵まれました。二〇一五年からは県立中央病院救命センターに勤務してドクターヘリで県内全域の現場救急を経験する機会をいただきました。全県的視野で救急医療を考えられるようになったと思います。二〇二〇年からはCOVID-19パンデミックへの対応に追

退職にあたって

救急災害・総合診療医学講座 教授 花田 裕之



われしました。独立した場所にあつたことや、被ばく医療に備えていた施設が感染症にも使えたことから、救命センターが中心となって対応しました。患者診療にあつたスタッフやホテル暮らしを強いられ、院内の他の部署への立ち入りを嫌がられたりといういろいろありましたが、人工呼吸器やECMOで救命することが出来た方がいたことは嬉しい限りです。救急専属となつて十六年目で退職となりますが、弘前大学医学部附属病院の救急の素晴らしところは、全ての診療科や部門がいつでも快くバックアップしていただけたところだと思います。救急入り口の患者対応は救急医の得意とするところですが、その後の専門治療は各診療科の治療と支えてくれる各部門（放射線、検査、臨床工学部など）がなくては救急に来た患者を十分治療することはできません。各診療科がそれぞれの予定で診療を行つている中で、突然の救急からのコンサルテーションにお応えいただくのは、大変であることは十分承知しております。それでも快く救命センターに足を運んで診療いただき、また緊急検体や輸血対応などいつも本当に感謝しております。今後とも引き続き地域の、青森県全体の患者様のために一緒に救急医療を行っていただければ幸いです。ご協力をお願いいたします。退職の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

二〇二六年三月いっ

二〇二六年三月いっ

おかげさまで47年

血管・炎症医学講座 教授 今泉忠淳



二〇二六年三月をもって定年退職することとなりました。弘前大学医学部に入学したのが一九七九年（十八歳）でしたので、四十七年が過ぎました。医学生、医師免許取得、研修医、大学院生、医学博士取得、ユタ大学博士研究員、助手、助教を経て、二〇一三年（五十二歳）に前任の佐藤敬先生の後を継いで教授職を拝命しました。講座の運営では、佐藤敬先生の「研究の過程で持った仮説に自由に「取り組む」という基本姿勢を引き継ぎ、教室員に自由に研究に取り組んでいただきました。助教であった松宮朋穂さんが保健学研究科の教授に昇任したこと、川口章吾助教（二〇〇三年卒）と立崎真幸助手（二〇一一年卒）の本学卒のMD研究者二名を講座に迎えたこと、この二名が第四十四回唐牛記念医学研究基金(A)(B)をアベック受賞したこと（本号の別記事参照）は嬉しいことでした。

「リサーチマインドを持った良医の育成」のためには大学院課程が重要と考えています。多くの優秀な大学院生たちと、臓器横断的に「炎症」「自然免疫」をテーマに共同研究をさせていただき、三十名以上の

く」は達成できませんでしたが、山の裾野にコツコツと小石を積み上げるような研究を継続できたと思います。四十七年間を振り返ってみると、本講座、旧脳研、バイオメデイカルリサーチセンター、医学研究科の各講座、弘前大学の各局、大学院生、研究室研修・卓球部・写真部の学生、学務・総務をはじめとした事務職員、附属図書館・出版会・資料館、79Mの同級生、鵬桜会、生協、東北化学薬品様、シバタ医理科様、青森みちのく銀行様など、本当に多くの皆様方にお世話になりました。ここに深く御礼申し上げます。

博士論文の作成に関わりました。小児科学講座の腎グロブの大学院生たちとは「なぜ腎疾患は風邪をひくと悪化するのか？」を、整形外科学講座の大学院生たちとは「関節リウマチの滑膜炎における抗ウイルス自然免疫応答の意義」を、呼吸器内科学講座の大学院生たちとは「気道上皮細胞の抗ウイルス応答におけるインターフェロン誘導遺伝子群の役割」を、研究室研修の学生達とは「血液脳関門

における自然免疫応答」について、追求して実験を行いました。その他にも、消化器血液免疫内科学、皮膚科学、胸部心臓血管外科学、消化器外科学、産科婦人科学、脳神経外科学、耳鼻咽喉科頭頸部外科学、歯科口腔外科学など多くの大学院生と一緒に仕事をさせていただきました。教授職を拝命した時、岩木山のように「頂は高く、裾野は広く」を目標とし、残念ながら「頂は高

退職にあたって

—Auftakt (アウフタクト) に寄せて—

病態薬理学講座 教授 村上 学



感動。不愉快極まりないことも多かった。辞めなかったのは行くところが無かったことと、子供の学資や自身の生活のためだ。

た。自分を惜しんでくれる人がいた。五月の朝焼けの中、涙で運転したのが昨日の事のようにだ。今、自分も、次の人生の

私は音楽のことは素人。バッハが好きだ。ドイツ語のアウフタクト（幕開け、音楽では弱起）とは、オーケストラの指揮者が棒を挙げ、振り下ろした時に出る最初の音までの短い動作（らしい）。指揮者はこの一瞬に、曲のテンポとイメージを凝縮する。

これまで大学で医師となる医学生のアウフタクトの手伝いをさせて頂いた。懸命に努力する人と働くのは

「We'll Meet Again」という歌が好きだ。第二次世界大戦時、英国の流行歌。英語は平易。「また会いましょう」という邦題だが、原文は「また逢える」という意志。さすがブリテン。

令和7年度医学教育等関係業務功労者表彰を受賞して

生体構造医科学講座 技術専門職員 藤岡直哉

令和七年十二月二日文科省三階講堂において松本洋平文部科学大臣、先崎卓歩大臣官房審議官、来賓として相良博典全国医学部長病院長会議会長ご臨席のもと、医学教育等関係業務功労者表彰の栄誉を頂きました。受賞者は全国の国公私立大学の医学・歯学の教育関係者百名が出席し、会場には静かな緊張感が漂い、厳かな雰囲気包まれていました。式典は国歌斉唱に始まり表彰状・記念品の授与、松本洋平文部科学大臣の挨拶では、受賞者がこれまで重ねてきた努力に對する労いと優しさが感じられました。さらに来賓祝辞、受賞者代表謝辞と続き、無事に閉会となりました。

平成十一年四月、私は医学部解剖学第二講座に技術職員として着任いたしました。皆様ご存じのように、弘前大学には「弘前大学白菊会」があります。会員の数が亡くなられた際には、ご遺体の引き取りに伺い、防腐処置を施したうえで解剖実習に提供いたします。解剖実習終了後、それぞれのご遺体を火葬し、平成十六年までは「ご遺骨返還式」を執り行っておりまして、翌年からは、式典に代えて、私達がお返しする形へと移行しております。この一連の流れが献体業務であり、現在も変わることなく続いております。

私がお迎えしたご遺体は、これまでに八百名を超えました。初めてお会いするご遺族にとっては、身内を亡くされた直後という、言葉にできないほどつらい状況の中で、献体の手続きについてご説明し、承諾書にご署名いただいたうえで、今後の流れをお伝えすることになります。ご遺族の皆さまは、故人の遺志を深く尊重し、大切なご遺体を医学の発展のために提供してください。地上で大学ほど美しいものはない。無知を憎む人が努力し、真実を見た者が知らしめようとする場所だから（メイスイールド）。弘前大学が真の大学として進んでいくことを期待して、筆を置かせていただきます。

この度は、荣誉ある日本性機能学会(JSSM Science Award)を賜り、誠に光栄に存じます。本賞は、将来の性機能に関する基礎・臨床研究を担う若手研究者を奨励し、日本性機能学会のさらなる発展を目的として、小林製薬株式会社支援のもとに設立されたものです。性機能に関する基礎研究や、将来的に臨床応用へと発展する可能性の高い研究が対象とされています。今回受賞した研究テーマは、「陰茎ヒアルロン酸代謝のメカニズム解明および勃起障害治療薬への応用」です。ヒアルロン酸は、分子数数万から数百万に及ぶ直鎖状高分子多糖であり、D-グルクロン酸とN-アセチルグルコサミンが交互に結合した単純な構造を持ちながら、細胞増殖、接着、遊走、創傷治癒、血管新生

など、極めて多様な生物学的機能に関与しています。一方で、その代謝機構には未解明な点が多く、特に細胞表面におけるヒアルロン酸分解機構については、長年不明な部分が残されてきました。これまでに我々の研究グループは、Transmembrane protein 2 (TMEM2) が細胞表面に存在するヒアルロン酸分解酵素であり、主に血管内皮細胞に発現して全身性ヒアルロン酸代謝の中核を担っていることを明らかにしてきました。臓器線維化は多くの臓器不全の終末像として知られており、その要因の一つとして細胞外マトリックスにおけるヒアルロン酸の過剰な蓄積が挙げられます。腎臓、肺、肝臓など様々な臓器において、ヒアルロン酸蓄積と線維化と



令和7年度 医学教育等関係業務功労者表彰式 文部科学省

日本性機能学会 JSSM Science Award を受賞して
むつ下北地域医療学講座 講師 藤田尚紀 (泌尿器科学講座)

ながら、細胞増殖、接着、遊走、創傷治癒、血管新生

(前ページより)
の関連が報告されてきた。だが、TMEM2と臓器線維化との関係、さらには陰莖組織におけるヒアルロン酸代謝機構については、これまで報告されていません。本研究では、陰莖組織におけるヒアルロン酸代謝機構および陰莖線維化におけるTMEM2の役割を明らかにすることを目的として、これらの知見を基盤として、最終的には



勃起障害に対する新たな治療薬の創出につながることを目指しています。今回の受賞を励みに、基礎研究と臨床医学をつなぐ橋渡し役として、今後も性能医学の発展に貢献できるように、一層精進してまいります。

研究賞(奨励賞)を受賞して

分子病態病理学講座 王 朕超

第29回日本臨床内分泌病理学会年次学術集会

このたび、第二十九回日本臨床内分泌病理学会において、「2型糖尿病による膵島β細胞Nkx6.1の低下は転写因子Hhexの脱抑制を経てβ細胞をα細胞表現へ転換する」の演題で日本内分泌病理学会研究賞(奨励賞)を受賞いたしました。日頃からご指導くださった水田教授をはじめとした分子病態病理学講座の先生方、研究室の皆さまのおかげで、このような栄誉ある賞をいただくことができました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

機能を持つ成熟した細胞が、他のタイプの成熟した細胞へと直接的に性質を変化させる現象を指します。近年、β細胞は可塑性をもち、β細胞からα細胞への分化転換が2型糖尿病におけるβ細胞容積減少の一因だと考えられています。しかしながら、その他の膵島細胞への分化転換の関与についてはまだよくわかっていない。そこで私たちは、二十四週齢の非肥満型2型糖尿病モデルGoto-Kakizaki(GK)ラットおよびWistarラットを用いて、膵島を染色し、免疫蛍光染色により組織学的に検討し、膵島内分泌細胞容積、ホルモン共陽性細胞を検討しました。

最優秀ポスター賞を受賞して

ミルク栄養学講座 新屋 輝長

1DFワールドリーサミット2025

このたび、チリ・サンティアゴで開催された国際酪農乳業連盟(1DF)主催の「1DFワールドリーサミット2025」において、弘前大学と雪印メグミルク株式会社との共同研究講座「ミルク栄養学研究講座」の結果、G



ラットではWistarラットに比しβ細胞容積の有意な低下を認めました。それと同時に、δ細胞容積とホルモン共陽性細胞割合の有意な増加もみられた。Nkx6.1は膵β細胞の、Hhexは膵δ細胞の発生、増殖、分化に不可欠な転写因子として知られていますが、そのために、私たちは大腸菌BL21(DE3)株を用いてNkx6.1蛋白を発現させて収集し、ゲルシフトアッセイでNkx6.1とHhexとの結合を検討しました。ゲルシフトアッセイでNkx6.1がHhexプロモーターに直接的に結合することが明らかとなりました。Minc6細胞にsiRNAを用いたノックダウン実験でNkx6.1とHhexとの関係を検討しました。Minc6細胞においてHhexの発現抑制したところ、δ細胞マーカーのHhexの発現が上昇したことを認めました。さらに、

最大規模の国際学会であり、世界各国の酪農家や産学官の専門家が一堂に会する場です。ポスターでは、「岩木健康増進プロジェクト」で蓄積された健康ビッグデータを活用し、乳製品摂取と健康増進の関係性を解析した成果と、それら研究成果を社会に還元するために地域社会で実施している健康増進活動について報告しました。

ヒト剖検膵臓組織ではδ細胞容積変化は認められなかったが、膵島シングルセル解析からδ細胞がさらに膵臓細胞に分化転換していることを長時間解析で明らかとなりました。特に、この細胞分化の軌跡に存在するソマトスタチンアーミラーゼ共陽性細胞細胞がButyrylcholinesterase(BChE)及び細胞損傷に対する保護に関する経路の有意な上昇を認めました。今後はさらにヒト非肥満型2型糖尿病の研究を進め、当該タイプの糖尿病に最も適する治療法を見出し、予後改善に寄与できるともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

「優秀演題賞」を受賞して

消化器外科学講座 関野 功磨

第78回日本胸外科学会学術集会(JATS) Case Presentation Awards 食道・食道外科部門

弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座の関野功磨と申します。このたび、二〇二五年十月二十三日から二十五日にかけて開催された第七十八回日本胸外科学会学術集会「JATS」で地域社会での健康増進活動という両輪の取り組み、そして「弘前」や「岩木」の名をポスター発表およびピッチセッションを通じて広く世界に発信できたことは、意義深い経験でした。

Case Presentation Awards 食道・食道外科部門において「重症汎発性栄養型表皮水疱症による食道破裂の一例」という演題で発表し、優秀演題賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。本症例は重症汎発性栄養型表皮水疱症が極めて稀な遺伝性疾患であり、本邦では約五百名程度の患者がいて報告されています。その中でも重症汎発性栄養型表皮水疱症はさらに稀で、表皮と真皮の間の接着因子の変異により、全身に水疱形成を引き起こす疾患です。本疾患は嚥下障害や食道狭窄、さらには食道癌を合併することが知られていますが、食道破裂を来した症例の報告はこれまでにありませんでした。本症例は過去に食道狭窄に対する治療歴を有していたため、当初は狭窄による口側食道内圧の上昇が食道破裂の原因と考慮しておりました。しかし、術前検査や切除標本の検討において明らかな食道狭窄は認められず、嘔吐などの食道内圧の急激な上昇を示唆するエピソードも確認されませんでした。そのため我々は食道壁そのものに脆弱性が存在するのではないかと考えました。切除標本を病理



学的に精査したところ、重症汎発性栄養型表皮水疱症に矛盾しない水疱形成に加え、食道壁全層に及ぶ炎症細胞浸潤、ならびに食道壁筋層内輪層における変性所見を認めました。これらの所見から、本症例では重層扁平上皮と基底膜間の剥離が慢性的な炎症を惹起し、その炎症が筋層を含む食道壁全層へ波及した結果、筋層の脆弱性をきたした可能性が示唆されました。本症例は重症汎発性栄養型表皮水疱症が食道内圧上昇を介さずに食道破裂を引き起こす病態であることを明らかにしました。重症汎発性栄養型表皮水疱症患者の診療方針を検討する上で新たな視点を提供できる症例であると考えております。本症例の治療にあたっては当科のみならず皮膚科の先生方をはじめとした他科、他職種の先生方の多大なるご協力により救命することができました。この場をお借りして感謝申し上げます。最後にありますが、本研究・発表に際してご指導いただきました多くの諸先生方に心より感謝申し上げます。今回の受賞を励みに、今後も臨床および研究に真摯に取り組んでまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



Society of Glycobiology 2025 Annual Meeting
「Best Poster Award」を受賞した
 つくば北地域医療学講座 講師 藤田尚紀
 (泌尿器科学講座)

この度、米国サンディエゴで開催されたSociety of Glycobiology 2025 Annual Meetingにおき、Best Poster Award (GlySpace Alliance Award) を受賞する栄誉にあずかりました。我々泌尿器科学講座の研究の柱である糖鎖研究に関する国際学会において、このような評価をいただけたことは、長年取り組んできた研究の独創性と将来性が国際的に認められたものと受け止めております。本研究は、多くの共同研究者やスタッフの支えによって成し得た成果であり、この場を借りて心より御礼申し上げます。

今回受賞した演題は、「D₂ immunoglobulin N-glycans play a role in protecting the endothelial Glycocalyx in murine sepsis」です。血管内皮グリコカリックスは、ヒアルロン酸やグリコサミングリカンなどから構成され、血管内腔を覆うことで血管機能の維持に重要な役割を果たしています。我々の先行研究では、尿路性敗血症において血管内皮グリコカリックスが高度に傷害され、その程度が急性腎障害や播種性血管内凝固症候群と相関することを明らかにしてまいりました。しかし、現時点ではグリコカリックス傷害を直接



この結果は、G₂構造を有する免疫グロブリンが血管内皮グリコカリックスの保護に与している可能性を示唆するものです。現在、重症感染症に対して臨床で使用されている免疫グロブリン製剤は、多様なN型糖鎖の混合体ですが、本研究の知見から、G₂リッチな糖鎖構成に最適化することで、グリコカリックス傷害に対する新たな治療戦略となり得る可能性が示されています。

報告
第1回青森県気道管理ハンズオンセミナーを開催
 麻酔科学講座 教授 斎藤淳一

全国に先駆けて気道管理ハンズオンセミナーを開催いたしましたので、ハンズオンセミナーのご紹介と今後の展望についてお伝えいたします。

昨年、消化管内視鏡検査・治療や不整脈アブレーション治療などの侵襲度の高い検査や治療を行う際に麻酔薬を用いて鎮静を行う症例が増加しています。現状では手術室外で鎮静を行う際に麻酔科医を派遣できず、各診療科の先生方に鎮静気道管理を行っていただいている状況です。安全な検査・治療を行う上で気道管理の知識や技術は重要な要素であることが認識され、各学会で気道管理に関するセミナーや講習会への参加が義務付けられることとなっておりますが、その普及は十分ではありません。そこで当科では気道管理ハンズオンセミナーを立ち上げることとしました。

この結果は、G₂構造を有する免疫グロブリンが血管内皮グリコカリックスの保護に与している可能性を示唆するものです。現在、重症感染症に対して臨床で使用されている免疫グロブリン製剤は、多様なN型糖鎖の混合体ですが、本研究の知見から、G₂リッチな糖鎖構成に最適化することで、グリコカリックス傷害に対する新たな治療戦略となり得る可能性が示されています。



二〇二五年十月四日(土)、弘前大学医学部附属病院大会議室を会場に第1回青森県気道管理ハンズオンセミナーを開催しました。本セミナーは気道管理学会の共催セミナーとして七社の協賛企業の協力の下、循環器内科医師、臨床工学技士、麻酔科医、初期研修医十八名を対象に行なうことができました。気道管理学会でインストラクターを務めている杏林大学医学部麻酔科学教室の本保晃先生と順天堂大学医学部附属浦安病院麻酔科の森悠先生を招聘いたしました。まずは森悠先生より「DAM総論」(D₂AMA) protect our patient from hypoxia」本保晃先生より「全方向的アプローチで取り組む杏林大学麻酔科シミュレーション教育」の教育講演を賜りました。休憩をはさんで、気道管理ハンズオンセミナーとしてシナリオトレーニングを行い、「マスク換気・ファイバー挿管」「声門上器具」「気管挿管」「輪状甲状間膜穿刺・切開」の四ブースをグループ毎にローテートしてもらい順次勉強していただきました。最後に、アブレーション治療中の換気困難、麻酔導入中の気道確保困難、アナフィラキシーショックによる換気困難など各グループで診療に合致したシナリオを作成して、チームとしてどのように危機を乗り越えるか緊迫感のあるシナリオトレーニングを体験してもらい、三時間半に及ぶハンズオンセミナーを終了いたしました。



二〇二五年十月四日(土)、弘前大学医学部附属病院大会議室を会場に第1回青森県気道管理ハンズオンセミナーを開催しました。本セミナーは気道管理学会の共催セミナーとして七社の協賛企業の協力の下、循環器内科医師、臨床工学技士、麻酔科医、初期研修医十八名を対象に行なうことができました。気道管理学会でインストラクターを務めている杏林大学医学部麻酔科学教室の本保晃先生と順天堂大学医学部附属浦安病院麻酔科の森悠先生を招聘いたしました。まずは森悠先生より「DAM総論」(D₂AMA) protect our patient from hypoxia」本保晃先生より「全方向的アプローチで取り組む杏林大学麻酔科シミュレーション教育」の教育講演を賜りました。休憩をはさんで、気道管理ハンズオンセミナーとしてシナリオトレーニングを行い、「マスク換気・ファイバー挿管」「声門上器具」「気管挿管」「輪状甲状間膜穿刺・切開」の四ブースをグループ毎にローテートしてもらい順次勉強していただきました。最後に、アブレーション治療中の換気困難、麻酔導入中の気道確保困難、アナフィラキシーショックによる換気困難など各グループで診療に合致したシナリオを作成して、チームとしてどのように危機を乗り越えるか緊迫感のあるシナリオトレーニングを体験してもらい、三時間半に及ぶハンズオンセミナーを終了いたしました。

ナーを終了いたしました。はじめの試みということもあり至らない点もあつたことと思いますが、受講生からのアンケートをみて非常に満足いただけるハンズオンセミナーであったと自負しています。日本内科学会更新指定講座への指定も決定いたしました。来年以降もさらに発展したハンズオンセミナーを開催する予定です。どうぞ奮ってご参加ください。

報告
ノーベル平和賞受賞「国境なき医師団」講演会
 医学教育学講座 特任教授 鬼島宏

令和七年十二月二日に弘前大学医学部基礎大講堂にて、ノーベル平和賞受賞「国境なき医師団」の講演会が開催されました。石橋恭之医学部長より挨拶があり、高橋健介先生(弘前大学平成十八年卒、現長崎大学高度救命救急センター救急・国際医療支援室)より「国境なき医師団」の活動を詳しく説明していただきました。

口演冒頭には、高橋先生ご自身のキャリア形成として、八戸市立市民病院で臨床研修終了後に長崎大学熱帯医学研究所に異動され、五島列島やベトナムでの勤務を経験されたことの紹介がありました。その後、平成二十六年から「国境なき医師団」の一員として、エチオピア(総合診療医)、リベリア(疫学専門家)で活躍され、国境なき医師団



口演冒頭には、高橋先生ご自身のキャリア形成として、八戸市立市民病院で臨床研修終了後に長崎大学熱帯医学研究所に異動され、五島列島やベトナムでの勤務を経験されたことの紹介がありました。その後、平成二十六年から「国境なき医師団」の一員として、エチオピア(総合診療医)、リベリア(疫学専門家)で活躍され、国境なき医師団



日本理事も歴任されています。難民キャンプを含めた現地の医療事情が示され、限られた医療資源(人的・物的)の中で、どう対応すべきかという問題を提起されておりました。

海外での医療事情を説明される中で、何度も強調されていたのが「医療資源の偏在」であり、この問題は海外(低所得国)でも国内(地域・へき地)でも同じであるということでした。つまり、国際医療協力と地域医療は、①医療資源が足りない、②医療を必要としている人がいる、③教育が大事という点で共通性があります。そして海外での医療経験は、専門分野だけではなく幅広い知識(地域医療・救急と共通)、問診と身体所見がとても重要(国内医療でござなりにされてませんか?)、現地の方に教える技能が必要(海外経験者にこそ医師育成に貢献を)という観点から国内の医療に生かすことができるということでした。



講演最後には、人生の過程で勉強したことは必ず役立つ、若い時は苦労すべし、夢や目標を持って働いていけば必ず実現するというテイクホームメッセージもいただきました。なお、今回の高橋先生招聘は、弘前・国境なき医師団関連実行委員会(代表・大塚麻友さん、医学部公認課外活動団体)が主体となって行われました。

高橋先生の講演は、青森県内での地域医療への貢献、さらには国際協力・国際援助への参加について具体的な内容を示していただき、とても分かりやすい内容で、「医療従事者を目指す学生が今何をなすべきか、何を大切にすべきか」が、心に大きく響きました。講演終了後には、参加者からの多くの質問にも優しく丁寧に対応いただき、とても有意義な講演会となりました。

講演最後には、人生の過程で勉強したことは必ず役立つ、若い時は苦労すべし、夢や目標を持って働いていけば必ず実現するというテイクホームメッセージもいただきました。なお、今回の高橋先生招聘は、弘前・国境なき医師団関連実行委員会(代表・大塚麻友さん、医学部公認課外活動団体)が主体となって行われました。

高橋先生の講演は、青森県内での地域医療への貢献、さらには国際協力・国際援助への参加について具体的な内容を示していただき、とても分かりやすい内容で、「医療従事者を目指す学生が今何をなすべきか、何を大切にすべきか」が、心に大きく響きました。講演終了後には、参加者からの多くの質問にも優しく丁寧に対応いただき、とても有意義な講演会となりました。

令和7年度 CBT・OSCEの実施状況

学務委員長 富田 泰史
(循環器腎臓内科学講座 教授)

令和三年五月に医師法が改正され、令和五年四月から臨床実習前の二つの共用試験が「公的」な試験として実施されています。コンピュータを用いて三百二十問の多選択肢形式問題に解答することにより「知識」の習得度を評価するCBT (Computer Based Testing) と、小試験室を回り、模擬患者さんとの面接や診察、手技などを実施し、その過程を評価することで、臨床における基本的な「技能」と「態度」を評価するOSCE (Objective Structured Clinical Examination) です。CBTとOSCEの合格基準は全国統一で定められており、同一年度内にこれら二つの試験に合格した医学生は「臨床実習生(医学)」(以前の学生・ドクトル)となり、指導医の下で診療参加型臨床実習を開始することが出来ます。

公的化されて三年目となる令和七年度の共用試験(CBT・OSCE)は、四年生を対象としてCBT本試験を令和七年九月、OSCE本試験を十一月に実施し、各々一回の再試験を含めて無事に終了しました。今年度のCBTの受験者数は百十九名であり、一日で実施可能でした。昨年度のCBT本試験の結果(合格率は八五%以下)を踏まえて、今年度からはCBT模擬試験の受験を必須

では、まず模擬患者の育成および認定評価者(機構の評価者認定講習会の受講を必須とする)の確保から着手しました。学生のOSCE前の準備に相当するブレ・クリニカルクラークシップを三週間実施し、十分な準備期間を確保しました。本試験当日は、八課題(医療面接、バイタルサイン、頭頸部、胸部、腹部、神経、基本的臨床手技、救急)を実施し、各ステーションに二名ずつの認定評価者を配置する必要があったため、外部評価者を含めて合計五十八名の認定評価者を要しました。学内からは五十名の認定評価者を確保し、限られた体制の中で試験を無事に実施することが

できました。再試験を含め、受験者全員が合格しました。六年生を対象とした臨床実習後OSCE(現時点では公的化試験ではありません)は、令和七年十一月に実施され、受験者百十三名全員が合格しました。学内外における診療参加型臨床実習を通じて、学生が大きく成長している姿には目をみ張るものがありました。ご指導いただきました指導医の先生方に、改めて深く感謝申し上げます。

今年度も、教職員が一丸となり共用試験を無事に終了することができました。ご尽力いただいたすべての教職員の皆様に、心より御礼申し上げます。

令和八年二月二十八日(三月一日)には、昨年度に引き続き、秋田大学と共同で秋田県大潟村にてリサーチドクター養成キャンプが開催されます。本事業を契機として、本学医学生のみならず若手医師、大学院生、若手教員を含む次世代の医療人材のリサーチ・チームを涵養し、秋田大学と交流を深めながら、医学研究科全体として基礎・臨床の両分野における研究活動のさらなる発展を目指します。学内の先生方におかれましては、引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

MSA活動中間発表会

医学教育学講座 准教授 花田 賢二

弘前大学は、令和六年度の文部科学省の「高度医療人材養成拠点形成事業(高度な臨床・研究能力を有する医師養成促進支援)」に、秋田大学の連携校として採用され、リサーチ・チームを有する臨床医・研究医の育成、およびそれに伴う研究業績の向上を目的として活動を展開しています。この事業の柱のひとつとして、医学科学生はStudent Assistant (SA)として雇用され(弘前大学ではMedical Student Assistant (MSA)、希望に応じて学内の各講座へ配属されます。学生の段階から研究に主体的に取り組む、また研究成果を学会や論文として発表す

ることにより、リサーチ・チームが涵養され、基礎医学と臨床医学の両面に精通した臨床研究医の育成を目指しています。今年度は各講座の多大なご協力により、医学科学生三十六人を令和七年七月からMSAとして雇用し、十六講座(基礎系八、臨床系八講座)に配属することができました。MSAは授業の合間や終了後の時間を活用して研究活動を行っています。その中間報告の機会として、令和七年十二月十日水曜日十七時三十分から約二時間にわたって中間発表会を開催しました。一人二分という短い時間ではありましたが、それぞれ研究

成果や今後の方針などについて発表していただき、五人ごとに七分前後の質疑応答の時間を設けました。多くの教員にもご参加いただき、活発な質疑応答が行われ、非常に充実した時間となりました。また、秋田大学からもオンラインでご参加いただきました。MSAのみならず教員にとってもリサーチ・チームを刺激された機会になりました。発表会終了後には懇親会を開催し、学生同士、教員同士、学生と教員が、基礎、臨床の垣根なく大いに交流を深めました。MSAに対し学内各講座より多くのご寄付をいただき、誠にありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。発表会のアンケートからは、一人一人の発表が短すぎず理解が追いつかない、議論が深まらない、ポスター形式などで自由に議論する形式にしてほしい、などのご意見が寄せられ、

第4回「多職種連携とDX技術で融合した北東北が創出する地域医療教育コモンズ」事業シンポジウム開催報告

医学教育学講座 准教授 浅野 研一郎

弘前大学医学部では令和四年度に文部科学省「ポス

トコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」に採択され、「多職種連携とDX技術で融合した北東北が創出する地域医療教育コモンズ」事業を推進して

来年度以降の課題として検討いたします。

三月一日には、昨年度に引き続き、秋田大学と共同で秋田県大潟村にてリサーチドクター養成キャンプが開催されます。本事業を契機として、本学医学生のみならず若手医師、大学院生、若手教員を含む次世代の医療人材のリサーチ・チームを涵養し、秋田大学と交流を深めながら、医学研究科全体として基礎・臨床の両分野における研究活動のさらなる発展を目指します。学内の先生方におかれましては、引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

て第四回事業シンポジウムを開催いたしました。特別講演では、昭和医科大学医学部医学教育学講座教授の泉美貴先生より、「授業をやめ、医療現場を経験すれば学生は自ら勉強する」と題した講演をいただきました。昭和医科大学では、講義時間を大胆に削減し、診療参加型臨床実習を長時間・高密度で配置する教育改革が進められており、特に五・六年次では指導医と学生を一对一で配置、患者サマリーを作成しポートフォリオとして蓄積する仕組みが導入されています。学生の主体的学修を強く促す教育モデルで、示唆に富む内容であるとともに、指導者の負担軽減にもつながると思われ、将来当院での導入も考慮すべき内容でした。

学科看護学専攻二年の武田愛莉さんは医学科一年生と同時に進められた早期体験実習を通じた患者理解とチーム医療の重要性について、それぞれの経験から自らの言葉で振り返り、他職種の視点を取り入れた学びを具体的に話していただきました。そしてコメントとして泉先生ならびに秋田大学の及川沙耶佳先生から鋭くも温かいコメントをいただきました。学生はそれぞれ柔軟に回答していました。会場からの質問に対しても、学生が自信をもって対応する姿が印象的でした。

続くパネルディスカッションでは筆者が座長を務め、本学ポストコロナ事業で実施している三つの教育プログラムについて概要を紹介した後、医学科・保健学科の学生に発表していただきました。医学科二年の泉山裕哉さんは防災教育を通じて得た学びについて、同四年の飯田康太郎さんは多職種連携演習における視点の広がりについて、保健

業の意義は事業期間中の教育改革にとどまらず、正規カリキュラム、地域連携、DX基盤の中で「継続可能な医学教育改善モデル」として機能している点にあることを強調しました。北東北は急激な人口減少・高齢化に伴い医療資源も限られており、教育資源を共有し合う「教育コモンズ」の形が不可欠であり、当日の学生の言葉そのものが、本事業の教育的効果と成果を適切に物語っていたと思います。最後に会場から寄せられた大きな拍手は、その賛同の証であったと感じられました。



第4回「多職種連携とDX技術で融合した北東北が創出する地域医療教育コモンズ」事業 シンポジウム

日時: 令和7年12月19日(金) 15:00~17:00
場所: アートホテル弘前シティ3階 エメラルド (〒036-8034 弘前市大町1-1-2)

【プログラム】

- 開会挨拶** 弘前大学理事(教育担当) 岡崎 雅明
- 特別講演** 演題: 「授業をやめ、医療現場を経験すれば学生は自ら勉強する」 講師: 昭和医科大学医学部医学教育学講座 教授 泉 美貴 氏
- パネルディスカッション** テーマ: 「災害対応教育と多職種連携教育について」
コーディネーター: 弘前大学医学研究科医学教育学講座 准教授 浅野 研一郎
パネリスト: 弘前大学医学部医学科2年 泉山 裕哉 氏
弘前大学医学部医学科4年 飯田 康太郎 氏
弘前大学医学部保健学科2年 武田 愛莉 氏
コメンテーター: 昭和医科大学医学部医学教育学講座 教授 及川 沙耶佳 氏
秋田大学大学院医学研究科 准教授 石橋 泰之 氏
- 閉会挨拶** 弘前大学大学院医学研究科長 石橋 泰之 氏

■申込方法: 参加申込受付フォーム、またはFAX(0172-39-5208)、メール(cchpe@hirosaki-u.ac.jp)にて【所属】【氏名】【連絡先電話番号/メールアドレス】を明記の上、申込ください。
■多職種連携とDX技術で融合した北東北が創出する地域医療教育コモンズ 事業 シンポジウム 参加申込受付フォーム <https://forms.office.com/r/7XtkXtks>
■主催: 弘前大学・秋田大学・弘前大学大学院・弘前医療福祉大学
■お問い合わせ: 弘前大学医学研究科総務グループ TEL:0172-39-5202 FAX:0172-39-5209 Email:cchpe@hirosaki-u.ac.jp

医学部五年生と 青森県知事との懇談会

副学務委員長 漆 館 聡 志
(形成外科学講座 教授)



令和八年一月十六日に、宮下宗一郎青森県知事と医学部医学科五年生との懇談会が医学部基礎大講堂にて行われました。県側からは宮下知事に加え、守川義信健康医療福祉部長、後村直希医療薬務課長らが出席し、本学からは福田眞作学長、石橋恭之医学部長、袴田健一附属病院長列席のもと行われました。この懇談会は平成十七年に始まり、以降二十一年の長きにわたり毎年開催されています。県知事と医学部の懇談会は全国的に見ても極めて稀なもので、学生にとっては大変貴重な機会になったことと思います。



懇談会の初めに宮下知事から「青森県の目指す医療の姿」と題した御講演がありました。まずご自身のご経験から医療においては「人とのつながり」が重要であること、またむつ市長時代の新型コロナウイルス対策にお

いては「地域とのつながり」が非常に重要であったことを述べられました。次に青森県の医療の現状を解説していただき、問題点を学生と共有したうえで、青森県の目指す医療の姿として、医師が地域に根ざし、地域の人とともにキャリアを積んでいける、そのような研修医制度を作っていくことがご自身の目標だと述べられました。その一環として青森県立中央病院と青森市民病院統合後の新病院の構想やオンライン診療についても解説いただきました。

その後、質疑応答に入り、学生と活発な意見交換が行われました。先日の青森県東方沖地震で大きな被害をうけた、むつ総合病院で実習中だった学生からの「災害対策」に関する質問には、災害時の行政の役割について説明をいただきました。この時、むつ総合病院においてわずか一日で復旧作業と患者移転が終了したことは、災害対策において賞賛に値する成功例であったと述べられ、これが成功した要因としては、やはり人とのつながり、地域

とのつながりが重要であったと述べられました。また「青森県で医師として勤務するメリットは何か」という質問に、青森県で働くことの意義や、やりがいについて重ねてご説明をいただきました。今回の講演会は地域定着枠の学生はもちろん、一般学生にとっても自らの医師としての将来像を描くうえで、大きなヒント

になったものと思います。現在、青森県と弘前大学、そして青森県立中央病院をはじめとした自治体病院との連携はますます強化され、本県独自の地域循環型医師育成システムはより充実したものへと進化しています。今回の懇談会を通じて、より多くの卒業生が青森県の地域医療に貢献してくれることを期待します。

第163回 弘前医学定例会 開催報告

第163回弘前医学定例会
弘前医学会庶務幹事 下 田 浩
(生体構造医科学講座 教授)

弘前医学会の学術活動における研究発表と交流の場として百六十三回を数える弘前医学会例会が令和八年一月三十日十三時二十分より弘前大学医学部医学科講義棟で開催されました。今回はこれまでの

会長の石橋恭之医学部長より開会の挨拶が述べられました。続いて、一般演題として十五題の研究発表がなされ、会場内では熱い討論が交わされました。今回より石橋会長の発案により



上野真治教授・乗田風南先生・西嶋春生講師・石橋恭之研究科長

優秀発表賞を受賞して

附属病院 脳神経内科 講師 西嶋 春 生

令和八年一月三十日に開催された第百六十三回弘前医学会例会において優秀発表賞を受賞しました。その結果、一般演題の優秀発表賞を「パーキンソン病モデルラットの基底核回路におけるシナプス形態の可塑的変化」を発表された西嶋春生先生(弘前大学医学部附属病院脳神経内科)が、研修医からの優秀発表賞を「好酸球増多と組織球症を呈したVEXAS症候群の一例」を発表された乗田風南先生(青森県立中央病院)が受賞され、石橋会長より賞状と副賞が授与されました。(写真)



例会講座座長 鈴木真輔教授 例会講座講師 工藤直美准教授

その後、例会講座として工藤直美先生(弘前大学大)の講演が行われました。講演内容は「パーキンソン病モデルラットの基底核回路におけるシナプス形態の可塑的変化」を発表された西嶋春生先生(弘前大学医学部附属病院脳神経内科)が、研修医からの優秀発表賞を「好酸球増多と組織球症を呈したVEXAS症候群の一例」を発表された乗田風南先生(青森県立中央病院)が受賞され、石橋会長より賞状と副賞が授与されました。

「パーキンソン病モデルラットの基底核回路におけるシナプス形態の可塑的変化」を発表された西嶋春生先生(弘前大学医学部附属病院脳神経内科)が、研修医からの優秀発表賞を「好酸球増多と組織球症を呈したVEXAS症候群の一例」を発表された乗田風南先生(青森県立中央病院)が受賞され、石橋会長より賞状と副賞が授与されました。

「パーキンソン病モデルラットの基底核回路におけるシナプス形態の可塑的変化」を発表された西嶋春生先生(弘前大学医学部附属病院脳神経内科)が、研修医からの優秀発表賞を「好酸球増多と組織球症を呈したVEXAS症候群の一例」を発表された乗田風南先生(青森県立中央病院)が受賞され、石橋会長より賞状と副賞が授与されました。

基底核回路におけるシナプス形態の可塑的変化」です。会の運営に関わった皆様、選考委員の先生方、日頃より研究に協力頂いている先生方、一緒に実験・研究に取り組んだ脳神経内科学講座の大学院生、そして長年ご指導頂いている富山誠彦教授に感謝申し上げます。

脳神経内科学講座では、以前からパーキンソン病モデルラットを用いて研究を行ってきました。パーキンソン病に対してL-DOPAは最も有効な治療薬ですが、病気が進行するとL-DOPA誘発ジスキネジアをよぶ異常不随意運動が現れて治療の妨げとなります。私たちのモデルラットではこのジスキネジアを容易に誘発することが可能です。今回発表された研究はジスキネジアモデルラットの基底核回路におけるシナプスの形態の変化を観察したものです。大脳基底核回路には直接路、間接路、ハイパー直接路と呼ばれる経路があります。そのうち線条体から黒質網様部に投射する神経細胞(直接路の一部)を可視化して形態評価を行いました。深謝申し上げます。

初期臨床研修医 優秀発表賞を受賞して

青森県立中央病院 初期臨床研修医 乗 田 風 南

青森県立中央病院初期臨床研修医の乗田風南と申します。この度は第百六十三回弘前医学会例会初期臨床研修医優秀発表賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。このような賞をいただきます嬉し

く光栄に思います。また、初期臨床研修医という立場で症例発表の機会をいただきました。選考いただきました審査員の皆様、ならびにご指導いただいた村井康(次ページへ続く)

(前ページより) 久先生、共同研究者の皆様
に深く感謝申し上げます。
誠にありがとうございます。

今回、好酸球増多と組織
球症を呈した非典型的な
VEXAS症候群に関して発
表させていただきました。
今回の発表を通してVEXAS
症候群という疾患について
詳しく学ぶきっかけとなり
ました。VEXAS症候群は
UBAI遺伝子の体細胞変異
を原因とする後天性自己炎
症性症候群であり、骨髄異
形成症候群などの血液疾患
を合併するなど多彩な臨床
像を呈することが特徴とし
て挙げられます。比較的新
しい疾患概念であることか
ら発表の機会を頂くまでは
疾患についての知識があり
ませんでした。存在を知ら
ない疾患の診断は不可能で
あることから様々な疾患
を知ることは今後の診療に
おいても重要であると思
います。好酸球増多や組織球
症を伴う疾患は多く存在し
ていますがVEXAS症候群
も鑑別疾患として挙げ、他
のVEXAS症候群を疑う所
見の有無を確認する必要が
あります。今回は非典型的
なVEXAS症候群に関して
症例発表をさせていただきました
でしたが、発表準備を通じ
典型的な症状に関するも
学び、広く知識を得ること
ができました。今回学んだ
ことを今後の内科専攻医
としての診療に生かし、
VEXAS症候群を疑った際
には、適切なタイミングで
適切に診断・治療を行うこ
とができるよう努めていき
たいです。
今回の受賞を励みに今後
も精進してまいります。誠
にありがとうございます。

Gold September 2025 「弘前城ゴールドライト アップ」開催

小児科学講座 助教 小林明恵



皆さまは「ゴールドリ
ボン」をご存知でしょうか。
ゴールドリボンは小児がん
啓発の世界共通のシンボル
で、「ゴールド」には、私
たちにとって最も大切な存
在である子どもたち、そし
て小児がん医療や研究、支
援に光を当てるという願
いが込められています。
毎年九月には、世界各地
で小児がんへの理解と支援
を広げる「ゴールド・セブ
テンバー・キャンペーン」
が開催され、日本でも二〇
二一年から全国的な取り組
みとして展開されていま
す。青森県でも二〇二二年
の弘前城ライトアップを皮
切りに、毎年ライトアップ
が行われています。
五年目となる今年度の
キャンペーンでは、初めて
全都道府県に広がり、全
国百六十三か所でゴールド
イトアップが行われました。

青森県内では弘前、八戸、
十和田の三か所が参加し、
弘前では弘前市のご協力の
もと、九月二十七日に「弘
前城」が金色に輝きました。
当日は、患者さんやご家
族、医療・支援に携わるス
タッフが集い、金色に照ら
された弘前城を見上げなが
ら、小児がんの子どもたち
への想いを共有しました。
また、今年も大学病院小児
医療センタープレイルーム
とのオンライン中継を行い、
入院中の子どもたちや付き
添いのご家族にも、ライト
アップの様子をご覧いただ
きました。当科で治療をや
り遂げた患者さんにご家
族、今まさに病氣や治療と
向き合っている患者さんた
ち、そしてスタッフが同じ
時間、同じ光を共有できた
ことを嬉しく思います。
小児がんは希少疾患であ
り、日常生活の中では身近
に感じにくい病気で
す。治療法の開発に
より生存率は向上し
ている一方で、難治
な経過をたどる場合
があること、治療後
に大人になっても注
意が必要な晩期合併
症、闘病経験をもつ
仲間と支え合うピア
サポートの重要性、
さらにはお子さんを
亡くされたご家族へ
のグリーフケアな
ど、子どもたちとそ
の家族を取り巻く課
題は多岐にわたります。
これらは医療機

開催報告

令和7年度弘前大学大学院医学研究科 「健康・医療講演会」

医学研究科広報委員会委員
皮膚科学講座 教授 赤坂英二郎

令和七年十一月二十二日
(土)、令和七年度弘前大学大
学院医学研究科「健康・医
療講演会」が、八戸市立市
民病院の講堂で開催されま
した。今回のテーマは「知っ
ていますか？ロコモティブ
シンドローム」であり、整
形外科のお二人のスペシャ
リストの先生にご講演いた
だきました。五十五名の市
民の方が参加され、会場は
ほぼ満員になりました。
一人目の演者は八戸市立
市民病院副院長兼整形外科
部長の沼沢拓也先生で、「骨
粗鬆症とサルコペニア」に
ついてご講演いただきました。
骨粗鬆症にともなう「い
つの間にか骨折」や「ドミ
ノ骨折」など、いままでも知
らなかつた骨折の病態につ
いて勉強できましたし、骨
粗鬆症とサルコペニアを予
防するには、適切な栄養摂
取と適度な運動が重要であ
ることを理解できました。
二人目の演者は弘前大
学大学院医学研究科むつ
下北地域医療学講座講師
の佐々木英嗣先生で、「変
形性膝関節症とロコモ
ティブシンドローム」に
ついてご講演いただきました。
方法、膝の痛みがロコ
モのサインとなりうるこ
と、ロコモが進行するこ
とを

写真コラム (31:最終回) 在府町

血管・炎症医学講座
教授 今泉忠淳



【写真】在府町の標柱

弘前大学医学部・医学研究科の所在地
は、「弘前市在府町」です。「在府町」の地
名は、江戸時代からありました。江戸時代
には、参勤交代制度があったため、全国の
大名は一年おきに江戸と領国とを行き来
しなくてはなりません。そのため、
各藩は、江戸にも上屋敷・中屋敷・下屋敷
などの藩邸を置かねばならず、従って、江
戸に駐在する藩士も雇用しなければなり
ませんでした。大名やその家臣が江戸で勤
務することを「在府」といい、江戸に定住
することを「定府」といいます。森鷗外著
「渋江抽斎」(岩波文庫)の渋江抽斎は、津
軽藩に召し抱えられた医師ですが、定府で
した。朝陽小学校の敷地内に、在府町の由来を記した標柱が設置されて
います【写真】。江戸で召し抱えた武士を弘前に連れてきた時に、この地に
住ませたので「在府町」という地名になったとのこと。弘前市立博物
館にある江戸時代の地図を見ると、現在の在府町の町割りも、現在まで
変わっていないことがわかります。時には、在府町界隈を散歩して、江戸
時代の城下町弘前に思いを馳せてみるのもよいと思います。私はこの3月
で本学を定年退職することとなり、このコラムも最終回となります。8年
間にわたり執筆の機会を与えていただき、ありがとうございました。本学
が、この由緒ある城下町にある医学部・医学研究科として、ますますの発
展を続けられることを祈念しています。



要介護につながってしまう
ことなどについて説明いた
だき、また適度な運動が予
防につながるのとこととで、
ロコモレなど具体的な運動
の方法も教えていただきま
した。
また、お二人が共通して
お話しされていたことで印

象深かったことは、日本は
世界一の長寿国であるが、
平均寿命と健康寿命には男
性九年、女性十二年ほどの
ギャップがあることです。
健康に長生きするために、
食事と運動に気を付けな
いといけないと強く感じま
した。
いずれの講演も、非常に
分かりやすく丁寧にお話し
いただきました。熱心にメ
モを取っている方も多くい
ましたし、講演会終了後
には質問をしたい市民の方
々が、演者の先生方の前
を作っていました。大変活
気な満ちた素晴らしい講演
会であったと思います。こ
の講演会で教えていただ
いた内容が、市民の方々の健
康維持に大いに役立つもの
であると確信しております。
講演くださった沼沢先生、



佐々木先生、この会を共催
してくださった八戸市立市
民病院の水野豊院長先生を
はじめ関係者の方々、公益
社団法人青森医学振興会の
皆様に心より感謝申し上げ
ます。ありがとうございます。

特集

第30回 弘前大学医学部学術賞

第27回 弘前大学医学部附属病院診療奨励賞

第44回 唐牛記念医学研究基金

第30回 弘前大学医学部学術賞

弘前大学医学部学術賞 (学術特別賞) 受賞報告

むつ下北地域医療学講座

講師 佐々木 英 嗣

この度、第三十回弘前大学医学部学術賞(学術特別賞)に選出いただきましたのでご報告させていただきます。まず初めにこのような栄誉ある賞を受賞させていただきます大変光栄に存じますし、長年にわたりご指導いただきました石橋教授をはじめ整形外科スポーツグループの先生方、疫学研究にご協力いただきましたスタッフ、参加者の皆様はこの場をお借りして深謝申し上げます。簡単ではございますが、研究内容のご紹介をさせていただきます。

我々のグループでは「変形性膝関節症(膝OA)に関する疫学調査」を行ってきました。主なフィールドは弘前大学COIを中心に取り組んでいる岩木健康増進プロジェクトになります。二〇〇七年に石橋教授の発案によりスタートしたこの疫学調査は初代井上亮先生のご尽力により基礎を作っていたいただき、これまで大学スタッフおよび大学院生総動員で調査・研究を継続しております。最近では

予防的介入を目的として早期膝OAに注目し、疫学研究でしか創出できないようなエビデンス構築を目指して研究に取り組んでおります。これまで約四十本の英文論文を公表することができており、本賞受賞におきましてはこれらの研究成果を総合的に評価いただけたものと考えております。



今回の受賞させていただきました研究課題は、「早期変形性膝関節症の病態解明に向けた疫学研究」とさせていただきます。早期膝OAとはX線学的OAの特徴である骨棘形成や関節裂隙狭小化が見られない

もかわらず膝痛や膝症状を有する状態で、構造的変化が生じる前に早期診断、予防的介入を行う目的で二〇一四年に提案された新たな疾患概念になります。弘前大学では世界に先駆けてこの早期OAに注目し、二〇一六年の岩木健康増進プロジェクトデータで早期OAの判定基準に基づく有病率や危険因子を明らかにしました。X線画像所見ではなく症状自体が重要なことを佐藤英太郎先生が明らかにしました。太田聖也先生は丁寧な膝関節MRI読影から、X線変化が生じる前の膝でもその背後に多くの病的所見が隠れており、半月病変、骨髄病変、滑膜炎が早期OAの主な病態であることを明らかにしてくれました。千葉大輔先生はこれらの病変の中でも半月病変、滑膜炎に注目し、超音波診断装置を用いて半月板逸脱および滑膜炎一水腫の定量評価を長年継続し、OA発症予測に取り組んでいただきました。石橋恭太先生は滑膜炎の程度評価に加え、肥満のある女性と滑膜炎の組み合わせでOA進行リスクが高いことを明らかにしました。骨髄病変に関しては太田聖也先生が低骨密度や骨代謝が関連することを示し、さらに石橋光先生、石橋恭太先生が脛骨アライメントも関連することを明らかにしてくれました。倉諒登先生は膝関節分野の手術において必ず評価が必要となる下肢全長X線画像における詳細なアライメント評価を行い日本人の下肢アライメント標準値を作成してくれました。これらのデータは早期膝OAにおける手術適応を考えるう

でも重要な判断材料になるデータであると考えております。さらに現在では富田良先生が千五百項目に及ぶ環境因子からAIを用いて危険因子解析を行っており、予防につながるデータ解析に尽力してくれております。また、企業研究者や学生と協力しながら、歩行パターンの詳細な解析や代謝との関連、ゲノム解析、肥満との関連など新たな取り組みも行っております。これらの多くの先生方の業績をまとめたのが本賞受賞となりましたので、私ではなくこれまで一緒に頑張ってきた整形外科のチーム力でのいただいた賞と思っております。改めましてご指導、ご

協力いただきました皆様へ深く御礼申し上げます。疫学研究という一見基礎的な分野ではありますが、臨床目線で患者さんにとって有益な研究するという根底・目標を忘れず、研究のための研究で終わらないよう日々精進を怠りません。まだまだやるべきがたくさんありますので、ご興味のある先生はお声がけいただければ一緒に頑張りたいと思います。今後の研究で終わらないよう日々精進を怠りません。まだまだやるべきがたくさんありますので、ご興味のある先生はお声がけいただければ一緒に頑張りたいと思います。

学術奨励賞

弘前大学医学部 学術奨励賞を受賞して

消化器外科学講座

助教 原

裕太郎

このたび、第三十回弘前大学医学部学術奨励賞という名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。また、心より御礼申し上げます。本研究は「Type 2 diabetes alters quiescent pancreatic stellate cells to tumor-prone state」という題名で行い、ICI insightに掲載されました。膵臓は高度な線維化を特徴とする腫瘍であり、その大部分を膵星細胞が占めると考えられております。これまで癌研究は主として癌細胞そのものに焦点が当てられてきましたが、2型糖尿病という全身性代謝異常が、間質細胞にどのような変化をもたらすのかは十分に解明されていませんでした。そこで本研究では、

協力いただきました皆様へ深く御礼申し上げます。疫学研究という一見基礎的な分野ではありますが、臨床目線で患者さんにとって有益な研究するという根底・目標を忘れず、研究のための研究で終わらないよう日々精進を怠りません。まだまだやるべきがたくさんありますので、ご興味のある先生はお声がけいただければ一緒に頑張りたいと思います。今後の研究で終わらないよう日々精進を怠りません。まだまだやるべきがたくさんありますので、ご興味のある先生はお声がけいただければ一緒に頑張りたいと思います。



シングルセルRNA解析を用いて膵星細胞の不均一性を詳細に解析し、2型糖尿病環境下で静止期膵星細胞が腫瘍促進的な状態へと再プログラムされることを明らかにしました。さらに、糖尿病病によって誘導されるCXCL13をマーカーとする膵星細胞集団が、血管新生や免疫環境の改変を介して腫瘍進展を促進する可能性を示しました。本研究は、2型糖尿病と膵臓の関連を「癌細胞外の間質」という新たな視点から捉え直すもので

シンングルセルRNA解析を用いて膵星細胞の不均一性を詳細に解析し、2型糖尿病環境下で静止期膵星細胞が腫瘍促進的な状態へと再プログラムされることを明らかにしました。さらに、糖尿病病によって誘導されるCXCL13をマーカーとする膵星細胞集団が、血管新生や免疫環境の改変を介して腫瘍進展を促進する可能性を示しました。本研究は、2型糖尿病と膵臓の関連を「癌細胞外の間質」という新たな視点から捉え直すもので

診療技術賞

医学部附属病院診療奨励賞 を受賞して(診療技術賞)

附属病院/看護部(東一)

看護師長 小山内 愁子

第27回 医学部附属病院診療奨励賞

この度、「外来パーキンソン病患者の自宅リハビリテーション支援の工夫」に対し、診療奨励賞(診療技術賞)という栄誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。選考委員の諸先生方、ご推薦くださった脳神経内科の富山教授、西島先生に深く感謝申し上げます。

パーキンソン病患者は年々増加しており、薬物療法と同様に運動療法も重要とされていますが、自宅での運動継続は難しい状況です。そこで二〇二一年より、外来看護師が中心となり、自宅リハビリを支える体制づくりを進めてきました。受診時には看護師が個々の運動機能や生活状況に合わせてスクワットや立ち上がり動作などの運動を一緒に選び、記録用カレンダーをお渡しして自宅での実施をお願いしています。次回受診時にその記録を確認し、努力を認めて励まし、必要に応じて目標を見直すというサイクルを積み重ねてきました。こうした丁寧なフィードバックが、患者様の運動継続につながっています。

外来は常に時間との勝負ですが、限られた時間の中でも看護師はコメントを添えたり、声かけを工夫したりと、できる限りの支援を続けてきました。また、看護師が十分に関われない日には、事務補佐員が診察中の医師と患者様の会話を共有してくれ、運動指導の質を保つうえで大きな支えとなりました。外来担当者が変わっても取り組みが途切れず継続しているのは、スタッフ一人ひとりが前向きに知恵を出し合い、外来(次ページへ続く)

(前ページより)
チーム全体で支えてきた成果だと感じていま



また、この取り組みは学術集
会でも発表し、
優秀演題として
選ばれました。
日々の外來での
工夫が学術的に
も評価されたこ
とは、スタッフ
にとって大きな
励みとなってい
ます。そして何
より、脳神経内
科の先生方が私
たちの取り組み
を認め、チーム
の一員として信
頼し支えてくだ
さったことが、継続の原動
力となりました。

診療技術賞

医学部附属病院診療奨励賞
を受賞して(診療技術賞)

附属病院/医療情報部
技術職員 成田 皓平

この度は、「本院独自の
システム開発と導入による
オンライン診療の進展」に
関する取り組みに対し、診
療奨励賞(診療技術賞)と
いう大変名誉ある賞を賜
り、誠にありがとうございます。
本取り組みの実現にあたり、ご指導・ご支援を賜りました多くの関係者の皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。
本院には、専門的な治療や継続的なフォローアップ

を必要としながらも、通院
そのものが大きな負担とな
っている患者さんが少なく
ありません。移動時間や
天候、家族の送迎などの事
情により、受診のたびに大
きな負担を抱えながらも、
治療のために通院を続け
ている患者さんが多くいら
っしゃいます。特に冬季に
は、豪雪や交通遮断の影響
により、本院への継続通院
が一層困難となる状況が生
じています。

心のふれあい賞

医学部附属病院診療奨励賞
(心のふれあい賞)を受賞して

附属病院/看護部(2-13)
助産師 古山 恵子

この度は「第二十六回医
学部附属病院診療奨励賞
(心のふれあい賞)」という
名誉ある賞を賜り、心より
感謝申し上げます。私たち
の病棟が行っている「産後
ケア」のとりくみを評価し

そのような状況の中で、
本院は県内唯一の特定機能
病院として、高度医療を必
要とする患者さんに対し、
居住地にかかわらず質の高
い医療を提供する社会的責
務を担っています。また、
人口当たりの医師数が全国
平均を下回る本県において
は、地域医療機関への医療
支援も不可欠ですが、近年
求められる働き方改革の観
点から、長距離移動を伴う
診療支援は、持続可能性の
面において大きな課題とな
っています。

う、取り組みをさらに磨
き、より良い支援につなげ
ていきたいと考えておりま
す。引き続きご指導ご鞭撻
のほどよろしくお願い申し
上げます。

この取り組みにより、弘
前大学における遠隔医療の
活用は大きく進展し、患者
さんにとっても、距離や移
動の制約を受けにくい診療
支援の選択肢が、現実的な
ものとなりました。
今後とも問診票の電子化な
ど、現場視点の改善を継続
し、病院業務の効率化と医
療DXの推進を通じて、地
域医療の質の向上に貢献し
てまいります。



児不安の軽減と母児の健康
維持を図ることを目的に、
二〇二四年から弘前市でも
産後ケア事業の提供を開始
することになりました。当
院でも産後ケア事業を提供
する施設として急ピッチで
準備を進め、同年七月より
宿泊型産後ケアの提供を開
始しました。



第44回 唐牛記念医学研究基金

助成金A
第44回唐牛記念医学研究基金
(助成金A)を受賞して

血管・炎症医学講座 助教 川口 章 吾

この度は伝統ある唐牛記
念医学研究基金助成金を賜
り、大変光栄に存じます。
青森みちのく銀行関係者の
皆様方、選考委員の先生方
に感謝いたします。

今回申請した研究テーマ
は、「脂肪肝新規治療標
的としての内因性PCNA
MDASシグナル」です。脂
肪性肝疾患は過食や飲酒に
より過剰な脂肪が肝臓に蓄
積した病態であり、その有
効な治療法は乏しく、その
協働による成果であり、こ
の受賞は大きな励みになり
ます。今後も地域における
大学病院の役割を意識し、
温かな産後ケアを行なっ
ていきたいと思っております。

病率は一般人口の二〜三割
と報告されています。ほと
んどが単純性脂肪肝という
良性的な病態ですが、一〇%
程度に脂肪肝という慢性
炎症を背景に、肝硬変、肝
臓癌へと進展する疾患が含
まれています。後者に対し
ては、積極的なフォロー
アップや治療介入が求めら
れますが、病初期には両者
を適切に鑑別することは困
難であり、臨床上の課題と
なっております。

当講座はこれまで細胞内
の核酸受容体であるPCNA
様受容体の研究を行って
おり、様々な慢性炎症の病態
に介入することを報告して
まいりました。MDASは
PCNA様受容体の一つであ
り、自然免疫系を活性化さ
せる機能が知られていま
す。自然免疫応答という観
点から考えると、単純性脂
肪肝ではウイルス等の病原
体に対する免疫応答が減弱
している一方で、脂肪肝炎
では炎症に伴い自然免疫系
が活性化しているという病
態の違いが認められます。
この点は両疾患の鑑別に有
用ではないかと考え、本研
究の着想に至りました。研
究助成を活用して、脂肪肝
炎の新規バイオマーカーの
同定や、新たな治療戦略の
創出、ひいては健康寿命の
延伸に寄与するような研究
を行ってまいりたいと考え
ております。引き続きご指
導のほど、よろしくお願
い致します。

助成金B

第44回唐牛記念医学研究基金 (助成金B) を受賞して

社会医学講座 助手 YANG YI-CHI



歴史と伝統を有する唐牛記念医学研究基金を賜り、身に余る光栄に存じます。故・唐牛敏世氏ならびに青森みちのく銀行様が、長年にわたり本学の医学研究の発展に多大なるご支援を賜ってきたことに、心より深く感謝申し上げます。

このたびは採択いただいた研究課題は、「地球測位システム(GPS)による長期行動ログを用いた地域住民の無気力(アパシー)と社会参加の経時的関連性の解析」であります。無気力は認知症の周辺症状として最も頻度の高い症状の一つである一方、高齢者に限らず一般成人にも広く認められ、生活の質や生活習慣病の発症にも深く関与することが知られています。無気力と社会参加の関係をより包括的に理解するためには、一般住民を対象とし、地域活動参加や施設利用などを記録する長期観察研究が不可欠です。

JPEAKSの一環として、岩木健康増進プロジェクト(岩木健診)の参加者を対象に、Google Pixel Watchを用いてGPS、睡眠、身体活動量などのライフログデータを連続的に収集する長期追跡調査は、二〇二五年度末より開始する計画です。本研究では、取得され

して定義します。弘前地域住民における無気力と社会参加との関連性、とりわけ飲食店、公園、ジムなどの施設利用状況との関係を明らかにすることを目的としています。

本研究を通じて得られる成果は、無気力の早期発見および予防戦略の構築に資するのみならず、地域住民の社会参加を促進するための実践的示唆を提供し、健康長寿社会の実現に寄与するものと期待されます。自身の専門性を最大限に活かし、革新的なセンシング技術と厳密な統計解析を融合させることで、高品質な研究成果の創出に全力で取り組む所存です。本基金に託されたご期待に真摯に応えるべく、誠実かつ着実に研究を遂行してまいります。

助成金B

第44回唐牛記念医学研究基金 (助成金B) を受賞して

血管・炎症医学講座 助手 立崎 真幸

このたび、第四十四回唐牛記念医学研究基金助成金Bに採択されましたのでご報告いたします。本基金は、故唐牛敏世氏の遺志をうけ、医学部における成人病の基礎的・臨床的研究を助成する目的で創設されたものです。今回の採択にあたり、選考委員の先生方をはじめ、日頃よりご指導いただいた

急性腎障害(SA-AKI)は院内死亡率が六〇%に達する極めて予後不良の疾患です。

頃よりご指導いただいたいる皆さまに深く感謝申し上げます。今回採択された研究課題は「敗血症性急性腎障害における膜貫通タンパク質「MEM2」の役割」です。敗血症性



学生だより

学生だより クリニカルクラークシップを終えて

クリニカルクラークシップを終えて

医学科六年 石井 裕 眞

かつて研修医の日常を描いたドラマで「学生以上、医師未満」というキャッチコピーが用いられた際、「研修医は医師である」との批判が寄せられたことを記憶しています。私はまだその是非を論じる立場にはありませんが、今振り返ると、この言葉はむしろクリニカルクラークシップにおける実習生のありようを象徴し

あり、特異的治療法が存在しないことが大きな課題となつています。本研究の目的は、SA-AKIの病態形成に関わる自然免疫応答・炎症機構を解明し、その制御を通じて新たな治療戦略の構築に寄与することです。特に、尿管上皮細胞における細菌感染応答の詳細を明らかにするとともに、当研究室の先行研究で抗炎症作用が示唆されている膜貫通タンパク質「MEM2」に着目し、その役割を解明することを目指します。敗血症は急性腎障害を惹起する最大の曝露因子であり、SA-AKIの発症には近位尿管上皮細胞に発現する「TJ2」様受容体4(TLR4)を介した自然免疫応答が深く関与します。しかし、TLR4アンタゴニストの臨

床試験では有効性が示されず、E-VIVOにおける治療戦略は未確立のままです。このような背景から、炎症制御に基づく新たな治療標準的の探索が求められています。本研究では、「MEM2」が細菌感染シグナルにどのように関与するかを初めて検討します。「MEM2」はヒアルロン酸代謝にも関わる分子であり、炎症制御の新たな視点を提供する可能性があります。また、一般的な不死化細胞株ではなく、より生体に近いヒト近位尿管上皮細胞(RPTEC)を用いる点も特色です。今回の採択を励みに、今後とも研究に邁進してまいります。引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

公益社団法人 青森医学振興会

- 【沿革】 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会鵬桜医学振興会発足(任意団体)
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立認可
平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

当会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。
○医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
○医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
○地域医療の振興に寄与する事業への支援
○海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

◎寄附のお願い
青森県の医学・医療の発展を促進するための各事業活動の一層の充実を図って参りたいので、皆様の格別のご支援・ご協力をよろしくお願ひいたします。随時、ご寄附を受付しております。
本会の公益目的事業に対する寄附金は、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。

Table with 2 columns: 会員種別 (Member Category) and 年会費 (Annual Fee). Rows include 医学部教員 (1万円), 医学部卒業生等 (2万円), 賛同する個人 (2万円), 賛同する団体 (10万円).

◎ご支援ご協力いただける方のご連絡をお待ちしております。

【問合せ先】 公益社団法人青森医学振興会事務局
TEL・FAX 0172-40-2872
学内内線 6519
E-mail: info@aomori-mpm.jp

クリニカルクラークシップを終えて

医学科六年 池田 紗 英

エビデンスに基づく診療のあり方に加え、生涯にわたる研鑽を続ける医師としての姿勢を示していただきました。また、同じ班の仲間や留学生、各分野で活躍されているOB・OGの方々との出会いは大きな刺激となり、自身の将来像を明確にする契機となりました。これらの経験は、学生である私たちの診療参加を寛容に受け入れてくださった患者さんお一人おひとりのご理解とご協力なくしては得られなかったものです。未熟な私たちを医療の担い手の一端として迎え入れてくださったことに、心より感謝申し上げます。
最後に、クリニカルクラークシップでお世話になったすべての皆様に、厚く御礼申し上げます。

クリニカルクラークシップを終え、これまで講義や実習で積み重ねてきた知識が、実際の臨床の場での役に活かされているのを感じました。教科書の記載だけでは理解しきれなかった病態や治療方針の背景を、実際の症例を通して学ぶことができました。また、患者さん一人ひとりが異なる生活背景や価値観を持っていることに触れ、医療は単なる疾患の治療ではなく、患者さん自身を支える営みであることを学びました。さらに、医師のみならず看

OB OG 書籍出版物の紹介 Vol.3

書評 中路重之

「認知症?と思ったら最初に読む本」

著者:長田乾(ながたけん) 昭和53年弘前大学医学部卒業
所属:横浜総合病院臨床研究センター長、横浜市認知症疾患医療センター長

昭和53年卒業で、私の一つ先輩の長田乾先生が、認知症の新しい本を出版されました。

長田先生は、認知症の分野では知らない人はいない先生です。しかし我々後輩からしたら、学生時代から有名な先生でした。今でも思い出すのは、医学部の先生方(特に教授の先生方)の似顔絵をユーモラスに描いておられましたし、医学部生に人気だったポニーというレストランで、長田先生の書かれた弘前の地図イラストのランチオンマットが使われていました。まさにプロ級の腕前でした。また、何のお話をしてでもわかりやすく話される物知りでした。

本著は、認知症に対する不安や誤解をやさしくほどこき、「最初の一冊」として非常にためになる書籍です。タイトルのとおり、読者が「もしかして認知症かも?」と感じた瞬間に手に取ることを想定しており、専門知識のない人にも理解できる平易な語り口が大きな魅力です。なかでも特筆すべきは、「次に何をすべきか」がひと目でわかるフローチャートが示されていることです。症状を感じたらまず確認すべきステップを図解。迷わずに適切な医療機関や相談窓口へアクセスできます。常にわかりやすさを優先する長田先生の面目躍如です。

本書の特徴は、認知症を単なる「怖い病気」

として扱うのではなく、「正しく知り、早く気づき、適切に対応すれば、生活の質を保ちながら付き合える病気」であることを一貫して伝えている点にあります。認知症のタイプ別分類とその特徴、鑑別の仕方、受診のタイミングなどが、具体例を交えながら丁寧に解説されています。また、困ったときに頼れる法制度についても語られています。

また、家族の接し方や心構えにも多くの紙幅が割かれている点が印象的です。叱らない、否定しないといった基本姿勢に加え、家族自身が抱え込みすぎないことの大切さも強調されており、介護する側への温かい配慮が感じられます。専門医としての知見に基づきつつも、現場感覚に根ざした現実的なアドバイスが多く散りばめられています。

また、早期発見・早期対応の重要性が強調されているのも印象的です。受診の目安や医療機関の選び方、診察時に準備しておくべきポイントなど、実際に行動する際に役立つ情報も多く述べられています。

本書は、全国民の認知症対策の道しるべとなる一冊ですが、医師や専門家にもお勧めしたいです。なぜなら、著者が認知症という大テーマを平易な語り口に落とし込んでその姿勢こそが医師や専門家の学ぶべき点でもあるからです。

留学だより

エモリー大学への臨床留学を終えて:米国で得た知見と弘前大学への還元

胸部心臓血管外科学講座 講師 齊藤良明

二〇二五年に放射線治療科へ入局しました、青木香子と申します。この度は、放射線腫瘍学講座を紹介する機会をいただきありがとうございます。専攻医一年目の目線から特色等を語らせていただきますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。
まず初めに、当科では全身のがんについて幅広く診察しております。毎週新患カンファを行っておりますが、前立腺、頭頸部、直腸等々、多岐に渡る分、それぞれの癌種におけるTNM、リスク分類等を覚えなければ、と日々記憶力を働かせています。また、最近では高精度治療が発達してきています。この発展により、病変部にはより多くの線量非一度当科へお越し下さい!

この度、エモリー大学心臓胸部外科でのクリニカルフェローとしての経験を共有する機会をいただき、医学部ウォーカー編集部の方々に心より感謝申し上げます。私は二〇一六年から二年間、ペンシルベニア大学での研究留学を経験しましたが、その際に出会った日本人医師たちの活躍や、米国での生活で得た家族との時間、そしてさらなる臨床技術向上への探究心が、今回の臨床留学への強い動機となりました。
臨床留学への道のりと米国の医療現場
米国での臨床留学を実現

するためには、USMLE各ステップの合格とECFMG Certificateの取得(現在ではOETという英語試験がUSMLE step CSの代わりに必要になっていきます)、そして何より人とのつながりを通じた施設へのアプライが不可欠です。私は研究留学から帰国後、年に一つずつステップをクリアしました。(途中コロナによる中断がありました。)その後H1Bビザ取得という壁に直面し、渡米直前まで書類手続きに奔走することとなりましたが、二〇二四年六月にようやくエモリー大学心臓胸部外科へと足を踏み出すことができました。
エモリー大学では、Emory University Hospital (E.U.H.)をはじめとする複数の拠点で、Michael Halkos教授やJohn Puskas教授といった世界的権威のもと修練に励むことができました。米国の現場は徹底した分業制であり、Advanced Practice Provider (APP) が術前後の管理を支えることで、外科医が手術に集中できる環境が整っています。
手術においては、僧帽弁形成術の大部分がロボット支援下で行われ、Ross手術や肺動脈血栓内膜摘除術(PTE)といった希少な症例にも日常的に遭遇します。特に補助人工心臓(LVAD)や心移植(OHT)の症例数は圧倒的であり、日本では中々経験困難な手術を経験し、重症心不全治療の最新線を感じることができました。

後輩の皆さんたちへのメッセージ
これから臨床留学を目指す弘前大学の学生・医師の皆さん、可能性は無限大です!一つのことには固執せず、何事にも興味を持って全力を出せる環境を求めてほしいと思います。英語の壁や手続きの煩雑さに気後れすることもあるかもし(次ページへ続く)

大学院生だより
消化器血液免疫
内科学講座に入局して

消化器血液免疫内科学講座の石戸谷奈緒と申します。この度は本誌へ寄稿させて頂き、心より感謝申し上げます。私は大学院生として研究を進める傍ら、弘前大学医学部附属病院において日常診療に従事しており、業務の間を活用しながら研究活動
や学会参加を行っております。
当講座は、消化器疾患をはじめ、免疫疾患や血液疾患など、非常に幅広い領域の疾患を扱っています。私の大学院の研究テーマは「自己免疫疾患である潰瘍性大腸炎について」ですが、学会では様々な疾患について発表する機会をいただいております。先日、二〇二五年七月に開催された日本消化器病学会東北支部第二十九回例会では「膵癌との鑑別を要しEUS/elastographyによる組織硬度評価を行った膵孤立性サルコイドシスの一例」という演題で発表の機会をいただきました。本症例は、超音波内視鏡を用いた膵疾患の良悪性の鑑別について検討した症例報告となりま



すが、専攻医の中から優秀な発表に贈られる支部奨励賞を受賞することができました。さらに、その後Clinical Journal of Gastroenterology誌に投稿、本年一月に掲載されました。このような賞や評価をいただくことは、今後の研鑽に向けた大きな励みになると感じております。
このように当講座では消化器疾患や免疫疾患、血液疾患など多岐にわたる疾患を対象としており、その分だけやりがいがあります。学生や研修医の皆さん、少しでも興味があれば、ぜひ気軽に遊びに、見学にきてください。

大学院生だより
放射線治療科の
一員として働き始めて

二〇二五年に放射線治療科へ入局しました、青木香子と申します。この度は、放射線腫瘍学講座を紹介する機会をいただきありがとうございます。専攻医一年目の目線から特色等を語らせていただきますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。
まず初めに、当科では全身のがんについて幅広く診察しております。毎週新患カンファを行っておりますが、前立腺、頭頸部、直腸等々、多岐に渡る分、それぞれの癌種におけるTNM、リスク分類等を覚えなければ、と日々記憶力を働かせています。また、最近では高精度治療が発達してきています。この発展により、病変部にはより多くの線量非一度当科へお越し下さい!



Dr. John Puskasと手術室にて

日本の医療の良さと今後の展望
米国で研鑽を積む中で、改めて日本の医療の利点も再認識しました。若手の頃から一貫して患者を担当し、詳細な術前検討を行う日本の教育体制は非常に貴重です。
今回の臨床留学は、本学の胸部心臓血管外科学講座においても前例の少ない挑戦でした。この道を切り拓くことを許可し、温かく送り出してくれた講座の皆様には、言葉では言い尽くせない感謝の気持ちでいっぱいです。私が米国で習得した手術手技や、効率的な診療システム、そして国際的なネットワークを、弘前大学の医療レベルのさらなる向上と国際化に貢献できるものになりたいと思っています。

(前ページより)
れませんが、今まで関わってくださったすべての人に誠実に、そして感謝を忘れずに向き合えば必ず道は開けます。結局のところ世の中は「仁義」でできているとよく感じます。

微力とは思いますが、この留学を終えた今、皆さんの今後の挑戦に対して常に

若手教員・医師だより

附属病院／高度救命救急センター
助教 杉山 佳奈

救急科の杉山佳奈と申します。私は青森県立八戸高等学校、山形大学を卒業後、キャリアの多くを二次救急病院で過ごしてきましたが、ご縁があり、現在は当院高度救命救急センターに在籍しています。三度の産休・育休を経て救急専門医を取得し、その後、三次救急を学びながら大学院を修了、当院麻酔科での研修を経て集中治療専門医を取得しました。今後も救急・集中治療を基盤に、病院前診療（ドクターヘリ・ドクターカー）、災害医療、学生・研修医教育、研究など、活動の幅を広げていきたいと考えています。僥倖ながら、この地域の救急医療について述べさせていただきます。

私は、この地域の救急医療を守るためには、救急医に限らず、専門性と総合的視点の両方をもつ医師が増えることが重要だと考えています。救急搬送件数は年々増加傾向にあり、特に高齢者の急性内科疾患が半数以上を占めています。高齢者は複数の慢性疾患や認

supportiveでありたいと考えています。私の経験が、皆さんのキャリア形成の一助となれば幸いです。

本稿の作成にあたり、具体的な留学準備や現地の生活立ち上げ等についても相談を受け付けています。興味のある方はぜひご連絡ください。

知機能の問題を抱えていることが多く、救急医療の現場では、より複雑で高度な判断が求められるようになってきています。一方で、救急車を受け入れる医療機関は減少しており、この地域では大学病院であっても、本来の使命である三次救急に加え、二次救急にも対応せざるを得ないのが現状です。対岸の火事だと感じておられる方もいらっしゃるかもしれませんが、これは救急科だけの問題ではありません。全国的には救急医は増加傾向にあり、女性医師の割合も増えていますが、この地域では人口あたりの救急医数は依然として少なく、救急科が常駐している施設は限られています。その結果、救急科以外の先生方が救急医療を担っている場面も少なくありません。この地域で医師として働く以上、ごく一部の高度専門領域を除いて、specialistであると同時にgeneralistであることが求められているのではないのでしょうか。救急医だけが現場に立ち続ける体制には、

若手教員・医師だより

胸部心臓血管外科学講座 助手 田口 亮

胸部心臓血管外科学講座の田口亮と申します。この度は本誌に寄稿させていただく機会を賜り、心より感謝を申し上げます。

私は岩手県二戸市の出身で、盛岡第一高等学校を卒業後、AO入試で弘前大学に入学いたしました。卒業後は青森市民病院での初期研修を経て、現在の胸部心臓血管外科学講座に入局し、医師としての研鑽を積んでおります。学生時代から慣れ親しんだこの地で、教員・医師として地域医療の一翼を担えることに大きな喜びを感じています。

私がこの道を選んだ最大

いづれ限界が来ると感じていました。

では、こうした状況の中で、我々救急医がやるべきことは何でしょうか。まず、specialistとして緊急性の判断と初期治療を的確に行いながら、司令塔として患者マネジメントを担うことだと考えます。患者マネジメントとは、救急科が主科となつて他科と連携して治療を行うこと、院内の適切な診療科へ振り分けること、あるいは病院間連携により他院へ依頼することが含まれます。大学病院に求められたことは、専門家へ迅速にアクセスできる一方で、院内他科への振り分けや、複数診療科にまたがるマネジメントに難しさを感じる場面が少なくないという点です。大学病院の総合力を最大限に発揮しつつ、

の理由は、心大血管手術における病態と治療効果の「明快さ」にあります。虚血を改善するバイパス術や破裂を未然に防ぐ動脈瘤治療など、シンプルかつ論理的な考え方に基づいた手術が、患者さんの生命に直結し、劇的な回復をもたらす点に強く惹かれました。また、開胸・開腹を伴う外科的手術からカテーテル治療まで、全身の血管を対象として幅広く戦略性の求められる手術手技も、この分野の大きな魅力です。

入局後、私は同期の中で比較的に長く、そこでは大学

病院とはまた異なる貴重な経験を積むことができました。特に市中病院では、下肢閉塞性動脈硬化症に対する血行再建や、下肢静脈瘤に対する血管内焼灼術、さらには透析患者さんのシャントトラブルへの対応など、いわゆる「血管外科」領域のニーズが非常に高いことを実感しました。心臓・大血管・末梢血管と専門領域の細分化がされている地域もありますが、本県では心臓血管外科医が包括的に担っています。開胸術から末梢血管手術まで、オールマイティに対応できる能力が求められる環境は、外科医としてのやりがいにも満ちており、地域の方々の生活を支えているという自負に繋がっています。

学生や研修医の皆さんの中には、心臓血管外科と聞くと別世界かのようなハードルの高さを感じる方もいるかもしれませんが、私自身もかつてはそうでした。当講座は、心筋梗塞や大動脈解離に対する緊急手術に携わる一方で、静脈疾患や末梢血管領域など、他診療科にも身近な疾患を診療する場面が多くあります。大学病院での実習では見えにくい所ですが、こうした多様な領域こそが心臓血管外科の奥深さでもあります。ぜひ身近なところから興味を持って当講座に気軽に触れていただければと思います。

最後に、日頃より救急医療を支えてくださっている院内の各診療科の先生方ならびに地域の先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。今後とも連携を大切にしながら、この地域の救急医療とともに支えていければと存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

泌尿器科学講座

泌尿器科学講座 教授 島山 真吾

当講座の歴史は、一九四五年に設立された青森医学専門学校附属皮膚科泌尿器科にその起源を發します。県立青森病院皮膚科泌尿器科長であった杉山萬喜藏先生が初代教授に就任されました。その後、現在の泌尿器科学講座は一九六二年に当時の皮膚泌尿器科学講座から分離独立する形で開設されました。

初代の舟生富寿教授から、一九八九年に第二代鈴木唯司教授へ、さらに二〇〇四年に第三代 大山力教授へと引き継がれ、二〇二三年十月より島山が教室の責任者を務めております。現在のスタッフは、泌尿器科学講座に加え、二〇一〇年に開講した先進移植再生医学講座および二〇一九年に開講した先進血液浄化療法学講座を含む合同チーム

μ体制となっています。外科系臨床医学の教室でありながら、PhDスタッフが一名所属していることが特徴で、基礎研究および大学院生の研究指導において重要な役割を果たしています。

弘大泌尿器科の最近のトピックスとして、当科で開発したSSPSA%検査（エス・ニーサン・PSA%）が保険収載され、実臨床で使用されていることが挙げられます。二〇二四年二月以降、検査件数は徐々に増加しており、現在は年間約二万件の需要が見込まれています。本検査に関して、弘大泌尿器科が日本のみならず世界をリードできるよう、今後とも最新情報を発信し続けていきたいと考えています。

また近年では、腫瘍血管を標的とした新規がん治療法の開発にも取り組み、臨床応用を目指しています。

具体的には、BNCT（ホウ素中性子捕捉療法）においてホウ素を腫瘍組織に効率よく到達させる方法、お

よび抗がん剤を腫瘍組織に選択的に送達する方法の本柱で研究を進めています。さらに糖鎖研究にも力を入れており、二〇〇五年以降、米国カリフォルニア州サンディエゴ郊外のSanford Burnham Prebys研究所へ継続的に留学生を派遣してきました。糖タンパク質糖鎖の研究を基盤として前述の腫瘍血管標的治療の開発を進め、その後グリコサミノグリカン研究へと展開し、新規ヒアルロン酸分解酵素 TMEM2 を発見しました。現在はノックアウトマウスなどを用いて、TMEM2の生物学的特性の解析を行っています。

また、新たな糖鎖分子として GlycoRNA が発見されました。これはRNAに糖鎖が付いている分子で、既存

(次ページへ続く)



研究室紹介



(前ページより)
の常識では考えられない分子です。当科ではいち早くCRISPR/Cas9研究に着手しており、まだまだ未知な分子ですが、新たな発見が楽しみな研究シーズです。

診療面では、腎・泌尿器外科手術の低侵襲化を積極的に推進してきました。かつては六センチの皮膚切開による前立腺全摘除術(ミニマム創手術)を行っていましたが、二〇一一年より手術支援ロボット「Vipro」を導入し、現在は国产ロボット支援機器「Lionot」を含む三台体制で低侵襲治療を行っています。特にロボット支援膀胱全摘術後の尿路変向として開発した「弘大泌尿器科オリジナルU字回腸膀胱」は全国的に注目を集め、この分野をリードしています。

また、二〇〇六年に立ち上げた腎移植チームは、これまで二百件以上の腎移植実績を有しています。特筆すべき点として、十年生着率が九〇%を超える良好な成績を維持しており、県内の移植医療に大きく貢献しています。最近では脳死ドナー提供、それに続く献腎移植も活発になりつつあり、症例数が増えてきております。現状は、献腎移植の待機時間が一年以上が当たり前ですが、すこしでも短縮できるように、推進したいと思っています。

以上のように、当講座では臨床・教育・研究の三本柱を軸に、泌尿器科医療の新たな未来を切り開いていきたいと考えています。これまでの皆様のご支援に深く感謝申し上げますとともに、今後ともご指導ごを賜りますようお願い申し上げます。

麻醉科学講座

麻醉科学講座 教授 斎藤 淳一

麻醉科学講座は、尾山初代教授(一九六五-一九八九年)が北海道大学から赴任して発足しました。その翌年、松木明知第二代教授(一九八九-二〇〇四年)をはじめとした第一期生が講座に入り講座の基盤が作られました。そして、二〇〇四年から廣田和美第三代教授に引き継がれ、麻酔・集中治療・ペインクリニック/緩和医療の各部門において優れた実績を残しながら発展してきました。二〇二五年から第四代教授として斎藤が拝命し、この麻酔科の伝統を引き継ぎつつ、更なる医療の発展と安定した地域医療へ貢献していく所存です。麻酔科の領域は、手術室における麻酔管理に加え、重症患者を治療する集中治療医学や急性から慢性の疼痛に対する治療、緩和医療などの幅広い分野にまで及びます。全国的に麻酔科に期待される業務内容が多岐にわたるため、慢性的な人員不足

足はあるものの臨床業務とともに麻酔科の深淵にせまる研究を継続しています。

1) 麻酔機序の解明
睡眠-覚醒回路から見た麻酔機序の解明です。主に、ラットを用いて、脳内の神経伝達物質の放出をマイクロダイアリースや脳組織標本を取り出して直接含有量を測定することで求め、さらに脳波解析および行動解析を行うことで機序解明に取り組んでいます。また脳スライス標本や培養神経細胞を用いて、ノルアドレナリン放出や細胞内濃度上昇に対する麻酔薬の作用を解析することで、最近でも検討しています。最近では、生理活性物質オレキシンと麻酔薬との関連について研究を進めています。臨床に於いても、血漿オレキシンA濃度およびノルアドレナリン濃度を指標に、全身麻酔中のオレキシンノルアドレナリン神経活動の解析なども行っています。

2) 周術期認知機能障害
手術を受ける患者は高齢化が進んでおり、術後せん妄の発症は患者のQOLのみならず予後にも大きな影響を及ぼします。バイオマーカー(好中球リンパ球比、尿酸など)の探索、脳波を用いた予測、機械学習(患者背景、血液検査、投与薬剤などの周術期データを収集)による予測モデルの確立を行い、発症予防に向けた取り組みを行っています。現在、当院整形外科教室や心臓血管外科教室との共同研究、日本医科大学や企業との共同研究を進めています。

3) ブドウ糖初期分布容量による体液量評価
前准教授の石原先生の考案したブドウ糖初期分布容量(通称GS)を用いて体液量の測定を行っています。生体物質であるグルコースを投与して測定するため安全性が高く、比較的短時間で体液量を測定することができ点が優れています。心臓手術や食道癌手術などの高侵襲手術、敗血症などの重症症例の体液管理に有用です。最近では強心薬や血管収縮薬といった薬剤の影響や人工呼吸、心タンポナーデが与える影響について検討しています。弘前大学特有の研究であるため教室として重要な研究として位置付けています。

その他にもケタミンの抗うつ作用、希釈式自己血輸血の保存方法、新しい生体モニターの有効性などについても研究をしています。岩木健康増進プロジェクトでは睡眠の質や脳波測定に加え、来年度からは新潟大学との共同研究も始まり、日々の臨床業務ももちろん大切です。当講座では臨床、研究、教育、地域医療のあらゆる面で活躍できる麻酔科医の育成に向けて取り組んでいます。

以上、当講座の歴史と現状について紹介させて頂きました。学内においては、現在まで多くの講座と関わって診療および研究を行っています。今後も麻酔科学講座をどうぞ宜しくお願い申し上げます。



コラム 医学部こぼれ話

本原稿の執筆現在(二〇二六/二/四)、青森県は猛烈な大雪に見舞われています。今回は医学部の話よりも、この止まない雪について少しこぼれ話してみたいと思います。

今年の青森は、まさに「歴史的」という言葉が相応しい猛威にさらされています。青森市の酸欠湯で積雪五百六十一センチを記録した昭和五十八年の「五九家雪」や、県内全域が麻痺した昭和三十八年の「三八家雪」に匹敵する、数十年に一度の危機です。今は医学・医療の研鑽より先に、まずはスコップを握らなければ一日が始まらない状況です。

日々の移動は命がけですが、これほど酷くなるとは想像以上でした。路面は凍結と融解を繰り返して、洗濯板のようなガタガタ状態。どこへ行くにもノロノロ運転を強いられます。車道脇に積み上がった雪の壁のせいで対向車のすれ違いは至難の業。運悪く大型

バスと鉢合わせようものなら、そこでもう「アウト」です。どちらかが延々とバックするしかない絶望的な持久戦が各地で繰り返されています。

除雪隊の方々も全力で頑張ってください。現場の人手不足は深刻なようです。事情に詳しい業界の人によれば、オペレーターの高齢化が進み、重機を動かせる手が足りず、除雪が全く追いついていないとの事でした。

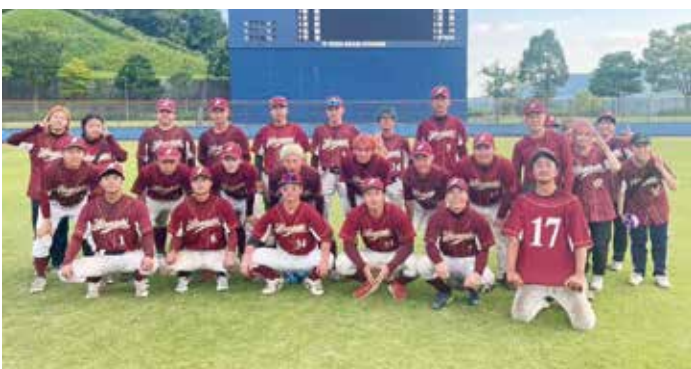
この異常事態が、目前に迫る大学入学試験に影響しないことを祈るのみです。公共交通機関の麻痺により、試験の実施さえ危ぶまれる日々。せめて受験当日には、この雪が少しでも解け、受験生の皆さんの「道」が物理的にも、そして将来の進路としても大きく開けていることを願ってやみません。

自然の前では無力ですが、一刻も早い春の訪れを祈るばかりです。皆様も、どうかご自愛ください。

部活動紹介

準硬式野球部

医学科三年 清野 快斗



準硬式野球部の歴史ですが、昭和二十二年に硬式野球部として発足し、昭和二十八年に現在の準硬式野球部となりました。創部八十一年の医学部で最も伝統のあるクラブの一つです。現在二十一人のメンバーと十人のマネージャーからなり、これまで東医体優勝九回、全医体優勝五回をはじめ、準優勝、三位入賞など優秀な成績を数多く残しています。昨年はベスト8で優勝できました。昨年は雪辱を晴らすべく、東医体優勝という目標に向かい日々練習に励んでいます。主な活動は四月から八月上旬の約四か月間で、平日は月曜と木曜で練習、土日は青森や北秋田で練習試合などを行っています。オフ日は、勉強やアルバイトなど自由に過ごしています。またバーベキューやキャンプ、花見やマネージャー感謝祭など、数多く野球以外のイベントがあり、野球以外の楽しみも非常に多い部活です。シーズンオフは、筋トレを中心に体づくりをして春を迎えます。昨年は、東医体では優勝を奪還すべく、東医体の開催地である神奈川へと乗り込みました。一回戦の

東京大学をコールドで、二回戦の東北医科薬科大学を下しました。しかし、三回戦では今大会で準優勝した山梨大学にサヨナラを喫し、悔しくもベスト8で敗退することになりました。今年の目標は、東医体の優勝です。昨年のベスト8という悔しさを超えるためにも、野球ができることに感謝をして一生懸命取り組みたいと思います。応援のほど、どうぞよろしくお祈りします。



医学部陸上競技部

医学科四年 森 裕理

医学部陸上競技部は二〇二六年で創部六十周年を迎えました。OB OGは総勢三百五十名、現在の部員は新入生にも恵まれ、男子二十八名、女子三十三名の計六十一名で活動しております。昨年度は北医体にて女子総合優勝、男子総合三位、男女総合三位。東医体にて女子フィールド優勝、女子総合四位、男子トラック五位、男子総合六位という結果を残すことができました。陸上競技部は、水曜日と土曜日の週二回、練習を行っています。夏場は弘前市の陸上競技場や弘前公園、冬場は坂や体育館を利用しながら練習しています。大きな目標としては北医体と東医



体の二大会がありますが、これ以外にも青森県内外で

行われる大会や毎年十月に開催されるアプルマラソンにもたくさんの方が参加しています。週二回の練習では少ないように感じるかもしれませんが、トレーニング室で自主練に励む人も多いためです。大学では、時間が様々で、個々で忙しさが異なります。また、部活動以外にもアルバイトや勉強、趣味のように大学生活でやりたいことはたくさんあると思います。空いた時間をどのように費やすか、陸上部は個人の判断を尊重する部活でもありません。部員は初心者から大会

写真部

医学科四年 山本 稚子

私たち、写真部は現在総勢四十五名を超える人数で活動しています。活動内容としては、毎年春と秋に弘

で優勝する人まで幅広いですが、それぞれが目標に向かって努力しています。未経験者でありながら、大きな大会で入賞する部員も多く、これは陸上競技が誰でも始めやすいスポーツであるが故だと思えます。練習以外にも花見や他大学との合同合宿、運動会、忘年会など、楽しいイベントがたくさんあります。HP、X、Instagramで日々の活動を発信しているので興味のある方は少しでも覗いてみてください。新しい仲間との出会いを心からお待ちしております。

また、デジタル作品も出展しており、一眼レフからスマートフォンまで、様々なカメラでの写真を撮ることが出来ます。自分のカメラを持っていない方も部で貸出を行っているので、初心者だけ良いカメラに触ってみたいという方も大歓迎です。少しでも興味がある方はぜひご連絡ください。新しい仲間との出会いを心よりお待ちしております。

第13回 若手研究者紹介動画

弘前大学大学院医学研究科

医学研究科では、各講座で研究されている40歳未満の若手研究者に、現在取り組んでいる研究内容や、研究を志したこれまでの経験を自ら紹介いただくことで、他の若手研究者や学部学生の研究に対する意欲を養うことに加え、紹介した若手研究者自身のモチベーションを向上させることを目的として、「研究者紹介動画」を作成・公開する取り組みを始めました。

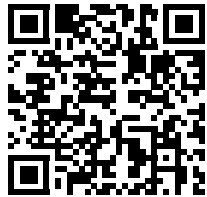
第13回目は弘前大学大学院医学研究科4年（整形外科学講座所属）の佐々木勇（ささき いさむ）先生。『日本における外傷性脊椎損傷の変化』についてご紹介します。



大学院4年 佐々木 勇
(整形外科学講座)

医学研究科ホームページで公開中！

紹介動画はこちら ↓



私たちの部活の特徴として、その最たるものといえば、やはりフィルム写真と言えると思います。写真部では、一九七〇年以前か



弘前レンガ倉庫美術館での写真展の様子

人事異動 (R7.12.1 ~ R8.2.28)

●医学研究科所属

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R8.1.31	地域救急医療学講座	助教	小山 一茂	弘前総合医療センター

●附属病院所属

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.12.1	内分泌内科、糖尿病代謝内科	助教	田村 亜由美	内分泌内科、糖尿病代謝内科 病院助手

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R7.12.31	高度救命救急センター	助教	太田 宗一郎	青森県立中央病院

お悔やみ

弘前大学名誉教授（元脳神経生理学講座教授）福田道隆 氏には、令和八年一月十四日に逝去されました。行年九十一歳
ここに、謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈りいたします。



編集後記

今回も貴重な寄稿をいただき感謝申し上げます。特に輝かしい研究成果の報告を多く目にいたしました。これも弘前大学が「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（JPEAKS）」に採択されたことの良い効果かと感じております。グローバルWell-being総合研究所も昨年末に開所され、益々の素晴らしい研究業績に期待が膨らみます。さて、私も研究者の端くれですが、最近の研究推進には生成AI（人工知能）が重要なツールといえます。この変化に抗うことの無意味さは理解できませんが、ただ全面的に受け入れることには抵抗があります。AIとの関わり方に悩みつづ、私は講座内でAI部門をつくりました。そこでは、ひとつのAIの使用を避け、各研究者がそれぞれ異なるAI（ChatGPT、Claude、Geminiなど）を担当し、様々なAIアウトプットを持ち合う行程を主軸としました。こんなことを一年以上やってきました。当初、AIを俯瞰したかのように振る舞っていた私に不思議な感覚が芽生えてきました。それは各AIにはそれぞれの特徴があり、それを個性に感じられるようになったのです（AIの個性なのか使用する担当者の個性なのかは不明ですが）。特徴や個性の存在は選択の必要性を生み出すので、このことが私の最近の研究行程におけるモチベーションのひとつになっていきます。Well-beingとは、「こころ」「からだ」、「社会的なつながり」が健やかで満たされている状態と学びました。「AI社会とのつながり」に戸惑っていた私も、AIからの知識を選択、統合する思考のなかに「こころ」のあり方を見つけたように感じます。